多賀城市文化財調査報告書第９集

山王遺跡

―昭和60年度発掘調査報告書Ⅰ―

昭和61年3月

多賀城市教育委員会

山王遺跡

―昭和60年度発掘調査報告書Ⅰ―

序

本市は、奈良時代から平安時代にかけて、陸奥の都として栄えた「多賀城」を有する史跡のまちとして、市民生活と歴史の融和を目ざして躍進しております。

今回、調査を行なった山王遺跡は、南面に美しい田園風景を残し、東方の丘陵上に緑豊かな多賀城跡を望む恵まれた自然環境の中に所在しております。

調査の結果、平安時代から近世始め頃にわたる溝跡や井戸跡が発見され、特に下駄、櫛、曲物容器、自在鉤などの日常生活用具が数多く発見され、当時の人々の生活を知る手掛りとなる貴重な資料となっています。

本報告書が、研究者のみならず、広く一般の方々にも活用されますれば、幸いと存じます。

最後に、発掘調査、整理、報告書の作成において、御協力をいただいた多くの方々に対して、心から感謝を申し上げる次第であります。

昭和61年３月

多賀城市教育委員会

教育長　玉　蟲　　誼

例　　言

1．本書は、多賀城市教育委員会が昭和60年度の国庫補助事業として実施した「山王遺跡他発掘調査」の結果をとりまとめたものである。

2．調査地区は、ＳＮ－Ⅱの略記号を用いて記録している。

3．本書の執筆・編集は、文化財保護係職員の協議を得て、石本敬、相沢清利が担当した。

4．本書の作成には、次の者が携わった。

　　滝口裕子、我妻悦子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子

5．木製品の樹種同定は、内藤俊彦氏（東北大学理学部植物園）に御願いし、付章として掲載した。

6．石製品の石質鑑定は、伊藤希久夫氏（塩釜高等学校）の肉眼観察による。

7．調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。

8．本書中の土色については『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄：1976）を参考にした。

9．遺物の整理においては、工藤哲司、斎野裕彦（仙台市教育委員会）両氏の御助言を賜った。

10．木製品（杭）の実測表現方法、部位名称等については、「山口遺跡Ⅱ」（仙台市教育委員会：1984）に準じた。

11．調査、整理に関する諸記録および出土遺物は、多賀城市教育委員会が一括保存している。

調 査 要 項

1．遺跡所在地：宮城県多賀城市山王字山王二区183-1、184-1

2．調 査 期 間：試掘調査　昭和60年４月17日～19日

　　本調査　　昭和60年５月27日～７月５日

3．調 査 面 積：400㎡（対象面積1100㎡）

4．調 査 主 体：多賀城市教育委員会　　教育長　玉蟲　誼

5．調 査 担 当：多賀城市教育委員会　社会教育課文化財保護係

　　社会教育課長　　柳原邦男

　　文化財保護係長　高倉敏明

　　技　　師　　滝口　卓、石川俊英、石本　敬

　　主　　事　　柏原靖史

　　嘱　　託　　千葉孝弥、相沢清利

6．調査協力者：阿部祝男（地権者）、東北歴史資料館

7．調査参加者：赤間かつ子、阿部美智子、阿部米子、加藤文一、熊谷あつ子、熊谷きみ江、黒崎庸治、後藤はつみ、桜井栄子、佐藤たま子、下道博信、高野敏子

本文目次

序　文
例　言
調査要項
Ⅰ．山王遺跡の立地と環境……1
Ⅱ．調査に至る経緯……3
Ⅲ．調査方法と経過……4
Ⅳ．調査成果……5
1．基本層位……5
2．発見遺構……6
(1) 掘立柱建物跡……6
(2) 掘立柱列跡……6
(3) 溝跡……8
(4) 井戸跡……12
(5) 土坑……16
3．出土遺物……19
(1) 土師器……19
(2) 須恵器……22
(3) 赤焼土器……24
(4) 灰釉陶器……24
(5) 中世陶器……25
(6) 瓦質土器……25
(7) 円面硯……25
(8) 瓦……25
(9) 木製品……26
(10) 石製品……41
(11) 金属製品……44
Ⅴ．まとめ……44
Ⅵ．山王遺跡から出土した井戸枠材と木製杭について……47

挿図・図版目次

第１図　遺跡分布図……2
第２図　調査区位置図……3
第３図　基本層位（調査区南壁）……5
第４図　農地整理前の畦畔……6
第５図　遺構配置図……7
第６図　ＳＡ01実測図……8
第７図　ＳＤ01セクション図……8
第８図　ＳＤ02・03セクション図……9
第９図　ＳＤ03北端部実測図……10
第10図　ＳＤ04・05セクション図……11
第11図　ＳＤ06～10セクション図……12
第12図　ＳＥ01・02実測図……13
第13図　ＳＥ03・04実測図……14
第14図　ＳＥ05実測図……15
第15図　ＳＫ01～03実測図……16
第16図　ＳＫ04・05実測図……17
第17図　ＳＫ06・07実測図……18
第18図　ＳＫ08・09実測図……19
第19図　出土遺物（土師器）……21
第20図　出土遺物（土師器、須恵器他）…23
第21図　堆積土出土遺物……24
第22図　出土遺物（中世陶器、瓦質土器）25
第23図　出土遺物（丸瓦）……26
第24図　出土遺物（木製品）……27
第25図　出土遺物（木製品）……28
第26図　出土遺物（木製品）……29
第27図　出土遺物（木製品）……30
第28図　ＳＥ05出土遺物（木製品）……31
第29図　ＳＥ05出土遺物（木製品）……32
第30図　ＳＥ05出土遺物（木製品）……33
第31図　ＳＥ05出土遺物（井戸枠材）……35
第32図　ＳＥ05出土遺物（井戸枠材、杭）36
第33図　ＳＥ05出土遺物（杭）……37
第34図　ＳＤ03出土遺物（杭）……39
第35図　ＳＤ03出土遺物（杭）……40
第36図　出土遺物（石製品）……42
第37図　出土遺物（石製品）……43
第38図　出土遺物（金属製品）……44

表１　井戸枠材と木製杭の樹種……48
図１　井戸枠および杭の年輪幅……48
図２　井戸枠および杭の直径の経年変化…48

図版１　農地整理前の畦畔（南側より）…49
図版２　ＳＤ01溝跡（東側より）……49
図版３　ＳＤ02溝跡（北側より）……49
図版４　ＳＤ03溝跡（北側より）……49
図版５　ＳＤ03内土坑状落ち込み 堆積状況49
図版６　ＳＤ03内土坑状落ち込み(南側より) 49
図版７　下駄出土状況（ＳＤ02）……49
図版８　漆器椀出土状況（ＳＤ05）……49
図版９　ＳＥ01井戸跡……50
図版10　ＳＥ02井戸跡……50
図版11　ＳＥ03井戸跡……50
図版12　ＳＥ04井戸跡……50
図版13　ＳＥ05井戸跡……50
図版14　ＳＥ05土層堆積状況……50
図版15　曲物底板出土状況（ＳＥ04）……50
図版16　盤出土状況（ＳＥ05）……50
図版17　ＳＫ06土坑……51
図版18　ＳＫ07土坑……51
図版19　折敷出土状況（ＳＫ06）……51
図版20　ＳＤ07・09溝跡等（北側より）…51
図版21　ＳＤ06・07溝跡等（北側より）…51
図版22　ＳＤ06～09溝跡等（南側より）…51
図版23　ＳＡ01柱列跡（南側より）……51
図版24　遺構面下層 堆積状況(北東側より)51
図版25　出土遺物……52
図版26　出土遺物（木製品）……53
図版27　出土遺物（木製品）……54
図版28　出土遺物（杭）……55
図版29　出土遺物（石製品等）……56

Ⅰ　山王遺跡の立地と環境

山王遺跡は、多賀城市山王、南宮の両地区を中心とする東西約２km、南北約１kmの広範囲にわたる遺跡である。今回発掘調査を行った地点は、遺跡範囲の中央部南端に位置し、その南面には水田地帯が広がっている。

本遺跡周辺は、七北田川と砂押川によって形成された自然堤防と潟湖性低地が発達した地域で、仙台平野の中の宮城野海岸平野に属する。沖積層の厚さは40～60m に達し、特に最上部は３～10m の厚さで、泥炭・有機質粘土～シルトと砂層との互層からなっている。また、七北田川流域の基盤層は、凝灰岩・シルト岩を主体とする第三紀中新統の七北田層と鮮新統の亀岡層よりなっている。これらは、上流域では四段の段丘面を形成し、当地域付近では沖積層下に埋没しているという（註１）。

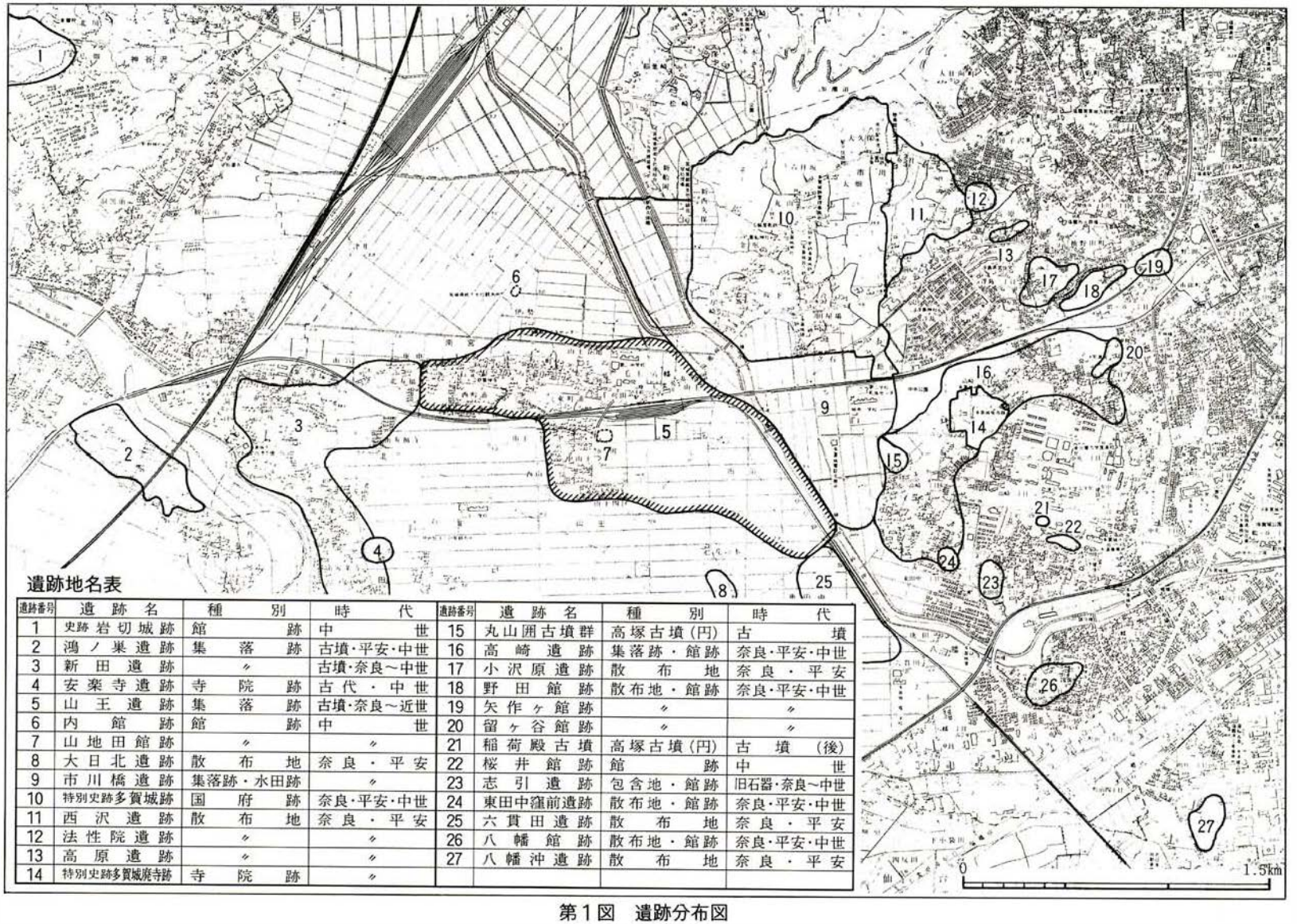
周辺の遺跡についてみると、現在までのところ本遺跡と同様に沖積平野上に立地する遺跡には、弥生時代以前にさかのぼるものは確認されていない。当地域に人々の生活の足跡を見い出すことができるのは、古墳時代以降のことである。

古墳時代に属する遺跡としては、本遺跡の西側隣接地域から七北田川東岸にかけて所在する新田遺跡がある。また、対岸の仙台市岩切地区には鴻ノ巣遺跡が所在する。新田遺跡は発掘調査において、古墳時代前期及び中期の遺物が、土坑等から多量に出土している（註２）。鴻ノ巣遺跡も過去数回の発掘調査が実施され、古墳時代中期の竪穴住居跡や焼土遺構、土坑等が検出されている（註３）。

奈良・平安時代に属するものとしては、本調査区の北東約1.5kmの丘陵上に特別史跡多賀城跡が所在している。さらに、この南面地域には市川橋遺跡が所在しており、山王遺跡、新田遺跡とともに、古代多賀城を取り巻く大規模な集落群を構成している。

中世に属するものとしては、本調査区の北西約 3.5kmの高森山の頂上部に、留守氏の居城である国指定史跡岩切城が所在する。さらに、前述した鴻ノ巣遺跡、新田遺跡からは、掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡等が検出されている。特に、新田遺跡の北寿福寺、南寿福寺の両地区からは、居住域を方形に取り囲む大溝が検出されており、中世集落の形態を知る上で貴重な資料である。このほか、館跡としては、本調査区の北東約 300m に山地田館跡、北方約 900m に内館跡が所在しているが、後世の改変が著しく、現在は確認することができなくなっている。

さて、本遺跡からは、過去の調査において古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構が多数検出されている（註４）。東町浦、西町浦地区では古墳時代中期に属する溝状及び楕円形状を呈する遺構や竪穴住居跡等が検出されている。遺物は土器類では、土師器、須恵器、続縄文土器があり、木製品ではフォーク状鋤、手斧柄がある。このほか、石製模造品、黒耀石製石器、



遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	史跡 岩切城跡	館跡	中世	15	丸山囲古墳群	高塚古墳(円)	古墳
2	鴻ノ巣遺跡	集落跡	古墳・平安・中世	16	高崎遺跡	集落跡・館跡	奈良・平安・中世
3	新田遺跡	〃	古墳・奈良～中世	17	小沢原遺跡	散布地	奈良・平安
4	安楽寺遺跡	寺院跡	古代・中世	18	野田館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
5	山王遺跡	集落跡	古墳・奈良～近世	19	矢作ヶ館跡	〃	〃
6	内館跡	館跡	中世	20	留ヶ谷館跡	〃	〃
7	山地田館跡	〃	〃	21	稲荷殿古墳	高塚古墳(円)	古墳(後)
8	大日北遺跡	散布地	奈良・平安	22	桜井館跡	館跡	中世
9	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	〃	23	志引遺跡	包含地・館跡	旧石器・奈良～中世
10	特別史跡多賀城跡	国府跡	奈良・平安・中世	24	東田中窪前遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
11	西沢遺跡	散布地	奈良・平安	25	六貫田遺跡	散布地	奈良・平安
12	法性院遺跡	〃	〃	26	八幡館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
13	高原遺跡	〃	〃	27	八幡沖遺跡	散布地	奈良・平安
14	特別史跡多賀城廃寺跡	寺院跡	〃				

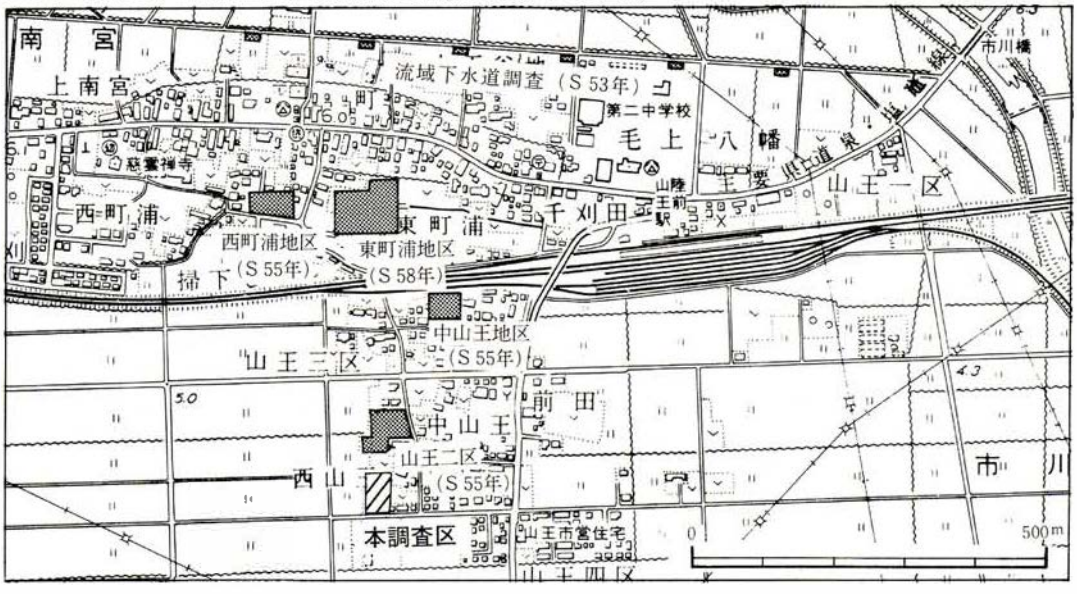
第1図　遺跡分布図

琥珀玉、ガラス小玉等が出土している。また、奈良・平安時代に属する遺構には、東町浦地区で検出された掘立柱建物跡、井戸跡、側溝をもつ道路状遺構等がある。さらに、その他の時代の内容にも個々に見るべきものがあり、全体を通してみても多賀城市の歴史の古代からの発展過程を解明する上で、貴重な遺跡であるといえる。

Ⅱ　調査に至る経緯

多賀城市の西部地域にあたる山王、南宮、新田地区は、市街化区域とされており、近年宅地造成が急増している状況にある。当地域は、多賀城跡を取り巻く集落跡として、関連する多くの遺構、遺物が存在することは周知のこととなっている。市教育委員会は、増加する宅地造成等の開発計画に対応するため、昭和55年度以来継続事業として、多賀城跡周辺遺跡の調査を実施してきており、次第に遺跡の性格を明らかにしつつある。

本調査については、昭和60年４月に多賀城市山王字山王二区における宅地造成工事の計画が地権者より提示されたため、本件申請について協議を行った。当該地は、山王遺跡の包蔵地内に位置し、さらに、昭和55年に発掘調査を行った北側約 100ｍの隣接地において、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が検出されていることから、古代の遺構が存在する可能性が充分考えられた。そこで、昭和60年４月17日から19日にかけて、遺構確認のための試掘調査を実施した。調査は、３ｍ×９ｍのトレンチ２本を南北方向に設定して行った。その結果、溝跡、土坑、ピット等の遺構を確認したため、申請者と再度協議を行い、本調査について全面的な協力が得られたことより、昭和60年５月27日から調査を実施したものである。



第２図　調査区位置図

Ⅲ　調査方法と経過

当該地の発掘調査では、調査対象面積約1100㎡のうち、遺構の分布が顕著であろうと予想された対象地域北半部に約 400㎡の面積で調査区を設定した。この設定にあたっては、排土場所及び試掘調査の成果を考慮した。測量基準点は国家座標を使用し、調査区南西部に原点１（X：-189,420.000、Y：＋12,633.000）、北西部に原点２（X：-189,395.000、Y：＋12,633.000）を設け、この２点を結ぶ線を基準線とした。さらに、３ｍ単位で原点１より北側を順にN－01、N－02…、東側をE－01、E－02…と表わした。また、これと同様に調査区全域に３ｍ方限のグリットを設定し、南北方向をアルファベット（A～I）。東西方向をアラビア数字（01～06）で表わし、その組み合わせによるグリット名をつけて、遺物の取り上げ等を行った。

発掘調査は、昭和60年５月27日より開始した。当該地は、最近まで水田として利用されていたが、調査時には50～80cmの厚さで盛土されていたため、調査に先だって、重機により旧水田面までの掘り下げを行った。調査は、始めに旧水田の耕作土である第Ia層と、床土である第Ib層の掘り下げを行う。これと並行して、実測図作成のための遣り方を設定する。遣り方水糸高は標高4,800mである（６月１日）。第Ib層除去の段階で、農地整理前の畦畔の痕跡を検出し、写真撮影、平面図作成を行う（６月４日）。第Ⅱ層を掘り下げ、調査区北壁沿いを東西方向に延びるSD01溝跡を検出する。また、北半部においてSK01～07土坑を検出する（６月６日）。調査区西側を重複して南北方向に延びるSD02・03溝跡を検出するとともに、すでに検出した各遺構の掘り込み調査を行い、順次、写真撮影、実測図作成を行う（６月８日）。調査区中央部でSD04・05溝跡、SE01～03井戸跡を検出し、掘り込み調査を行う（６月22日）。前記の各遺構の調査をほぼ終了する。これらは、重複関係や出土遺物等から、おおよそ中世に属する遺構であると判断した。引き続き、SD06～08溝跡とSE04・05井戸跡を検出し、掘り込み調査を開始する。なお、SD06溝跡とSE04井戸跡の埋土中に、灰白色火山灰が含まれることを観察した（６月24日）。SE05井戸跡は、井戸枠が認められたほか、多くの木製品が出土したことから、写真撮影や実測図作成を数回に分けて行う（６月28日）。調査区南東部でSB01・02建物跡をはじめとする多くの小柱穴を検出し、掘り込み調査を行う。また、これらより規模が大きく、方形を呈する２つの柱穴が、南北方向に並ぶことを確認したため、この延びを確認する目的で調査区を南側と東側に拡張する。その結果、南側にのみ新たに同規模の柱穴を確認し、この遺構をSA01柱列跡とした（７月３日）。各遺構の調査をほぼ終了し、調査区全景の写真撮影を行う。その後、基本層位を確認するため、調査区南壁沿いに１ｍ×５ｍのトレンチを設け、深さ約80cmまで掘り下げを行い、壁面で旧河川跡を観察する（７月４日）。７月５日にトレンチの写真撮影、セクション図作成を行い、すべての調査を終了した。

Ⅳ 調査成果

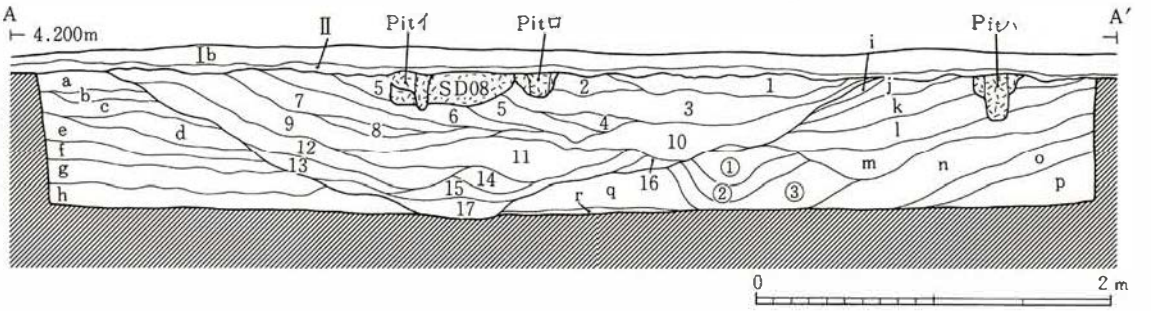
1．基本層位

第Ia層　旧水田の耕作土で、やや粘性を帯びた褐灰色シルト層からなる。厚さ約20cmを計り酸化鉄斑紋が若干認められる。

第Ib層　旧水田の床土で、砂質気味の褐灰色シルト層からなる。厚さ10～15cmを計り、酸化鉄斑紋の集積が認められる。

第Ⅱ層　明黄褐色と褐灰色シルトをブロックに混入する灰黄褐色シルト層からなる。調査区内のほぼ全域に認められるが、厚さは薄く北側で約8cm、南側で約5cmを計る。土師器、須恵器等の遺物を若干含む。

調査区南壁で土層観察を行った結果、第Ⅱ層より下層は黄灰色を基調とした砂質シルト層及び砂層が10～20cmの厚さで幾層にも堆積し、重複した小河川跡を形成している。これらの堆積土の上面が遺構検出面である。



層位	土色	土性	備考
堆積土			
Ⅰb	褐灰色	シルト	酸化鉄を含む
Ⅱ	灰黄褐色	〃	明黄褐色土と褐灰色土が混入
遺構埋土			
pitイ	黒褐色	シルト	掘り方
〃	〃	〃	柱痕跡 カーボンを含む
pitロ	黄褐色	〃	掘り方
〃	黒褐色	〃	柱痕跡 カーボンを含む
pitハ	灰褐色	〃	掘り方
〃	黒褐色	〃	柱痕跡 カーボンを含む
旧河川堆積土			
1	黄灰色	シルト	マンガン粒を含む
2	〃	砂質シルト	〃
3	〃	シルト	砂を含む
4	〃	〃	
5	褐灰色	砂	
6	黄灰色	シルト	粗砂を含む
7	灰黄色	〃	〃
8	〃	〃	〃
9	〃	〃	上方に植物遺体、下方に粗砂を含む
10	灰黄色	シルト	植物遺体を含む
11	黄灰色	砂	粗砂
12	灰黄色	シルト	植物遺体を含む
13	褐灰色	砂	植物遺体を層状に含む
14	青灰色	〃	グライ化

層位	土色	土性	備考
旧河川堆積土			
15	青灰色	砂	植物遺体を層状に含む
16	〃	〃	
17	〃	〃	植物遺体を含む
a	灰黄色	シルト	カーボンを含む
b	〃	〃	砂質土を若干含む
c	〃	砂質シルト	
d	黄橙色	砂	
e	灰黄色	〃	上層より粒子が細かい
f	黄橙色	〃	粗砂、細砂が層状に入る
g	〃	〃	
h	青色	〃	
i	灰黄色	シルト	
j	〃	砂	
k	〃	〃	砂とシルトが互層になる
l	黄橙色	〃	一部グライ化
m	青灰色	〃	細砂と粗砂が層状になる
n	〃	〃	植物遺体を層状に含む
o	〃	〃	上層より細かい砂
p	〃	〃	〃
q	〃	〃	
r	〃	〃	上層より粗い砂
①	灰黄色	〃	
②	〃	〃	
③	青灰色	〃	

第3図　基本層位（調査区南壁）

2．発見遺構

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡２棟、掘立柱列跡１条、溝跡10条、井戸跡５基、土坑９基と農地整理前の畦畔の痕跡である。

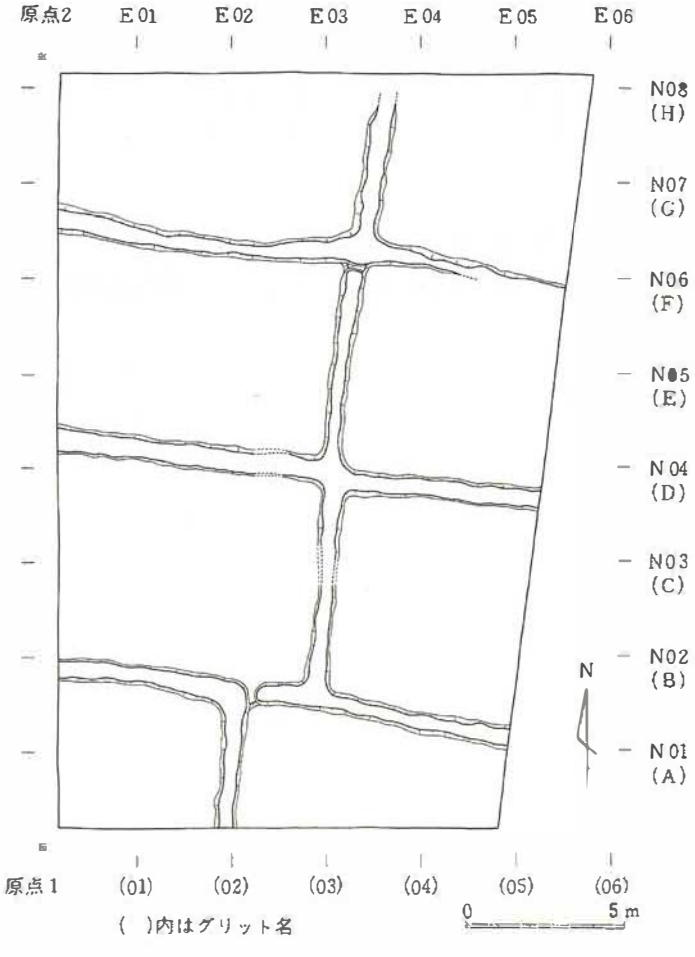
(1) 掘立柱建物跡

ＳＢ01掘立柱建物跡　調査区南端のほぼ中央に位置する。ＳＤ07・08溝跡と重複関係にありこれらより新しい。東西１間、南北１間あるいはそれ以上の建物跡である。南側で、さらに調査区外に延びると思われ、全体の規模は不明である。柱間寸法は、北側柱列で 3.7m 、東側及び西側柱列で2.3 m を計る。建物方向はＮ－３°－Ｅである。柱穴掘り方は、ほぼ円形で径20～30cmの小形のものである。埋土は黒褐色シルト層からなる。柱痕跡は３ヶ所で認められ、径約10cmを計る。そのうち北東隅柱穴においては、柱材が残存している。遺物は出土していない。

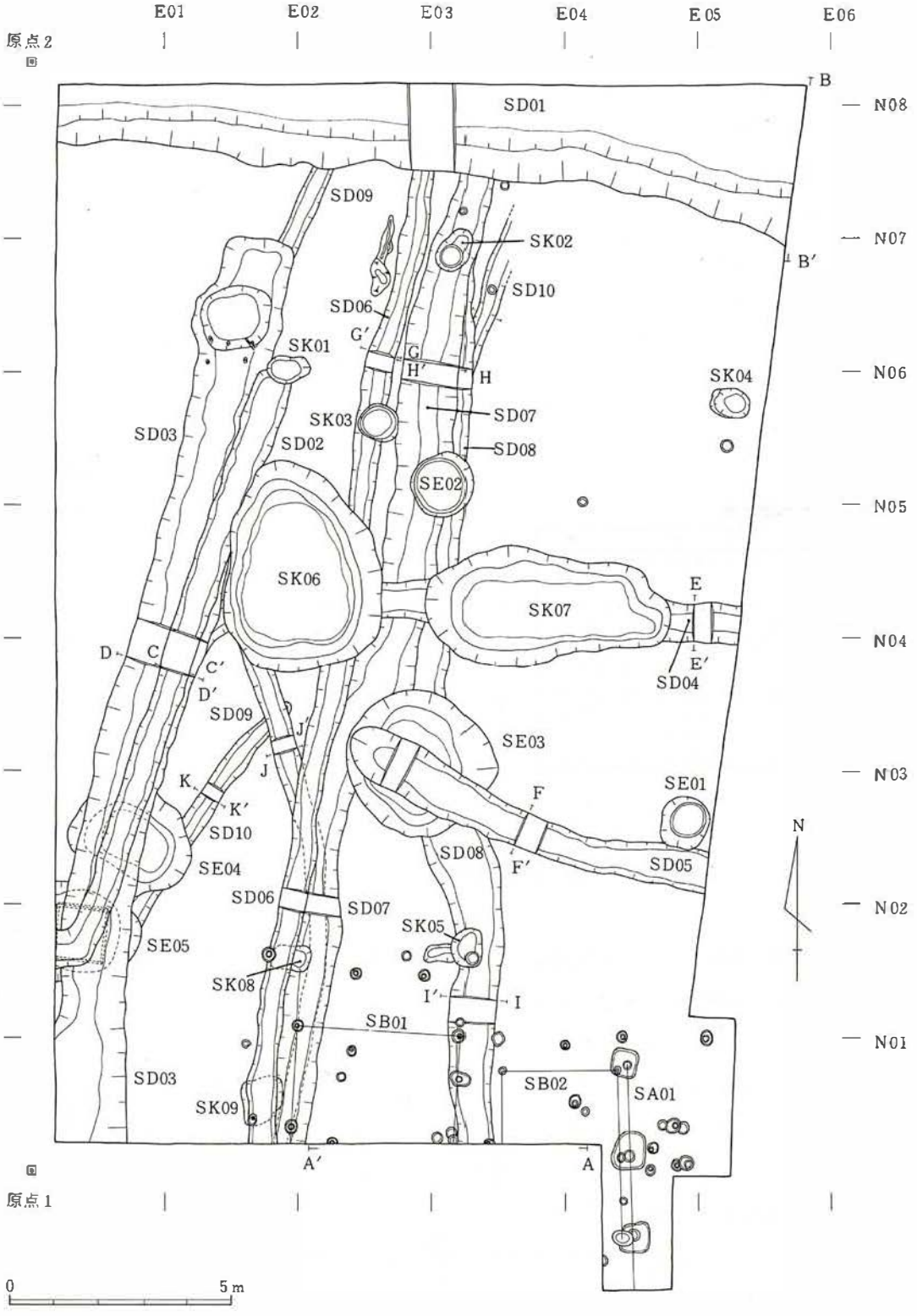
SB02掘立柱建物跡　調査区南東部に位置し、ＳＢ01建物跡の東側に近接する。ＳＡ01柱列跡と重複関係にあり、これより新しい。東西１間、南北２間あるいはそれ以上の南北棟建物跡である。柱間寸法は、北妻柱列で2.55m 、東側柱列で北から1.95m ＋1.85m を計る。建物方向は発掘基準線にほぼ一致する。柱穴掘り方は円形及び楕円形を呈し、径約20cmを計る。埋土は黒褐色シルト層からなる。また、柱痕跡は認められなかった。遺物は出土していない。

(2) 掘立柱列跡

SA01掘立柱列跡　調査区南東部に位置する。ＳＢ02建物跡と重複関係にあり、これの東側柱列に切られている。南北柱列２間を確認したのみであるが、さらに南側の調査区外に延びる可能性があり、また、この柱列を西側柱列とする建物跡になることも考えられる。柱間寸法は北から2.05m ＋1.75m を計り、方向は発掘基準線にほぼ

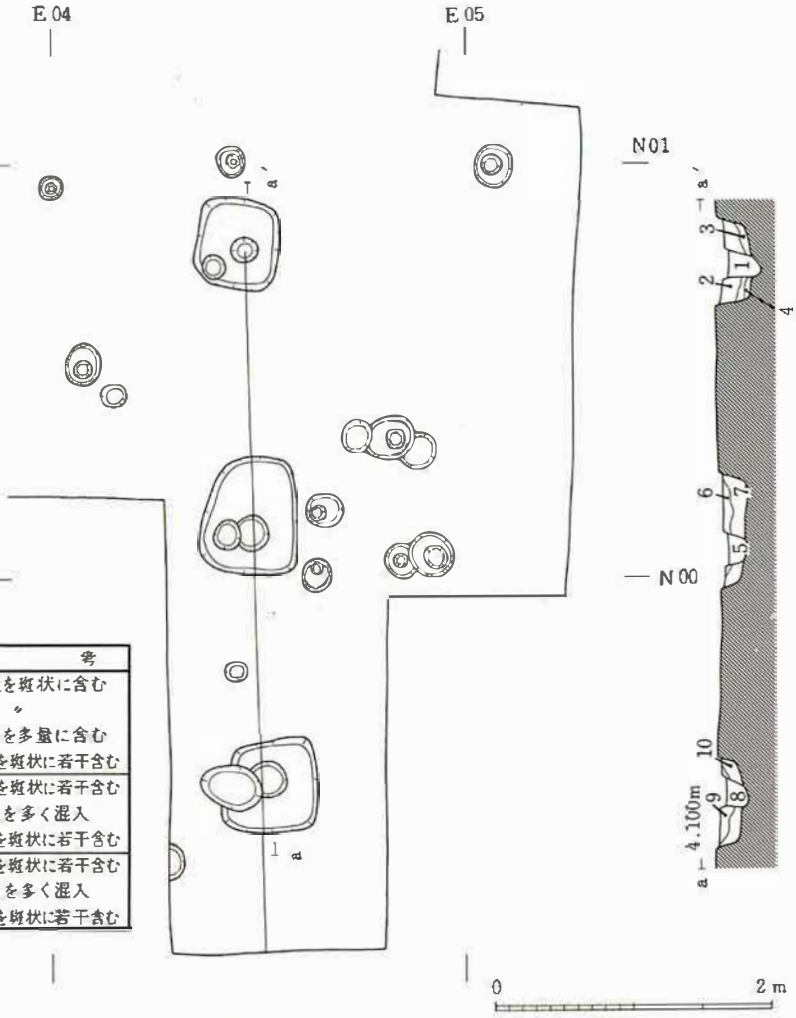


第４図　農地整理前の畦畔


E01
E02
E03
E04
E05
E06
原点2
原点1
N08
N07
N06
N05
N04
N03
N02
N01
SD01
SD09
SK02
SD10
SD06
SK01
SK04
SK03
SD07
SD08
SD03
SD02
SE02
SK06
SK07
SD04
SD09
SE03
SE01
SD10
SE04
SD08
SD05
SD06
SD07
SK05
SE05
SK08
SB01
SD03
SB02
SA01
SK09
N
0
5m

第5図　遺構配置図

一致する。柱穴掘り方は方形及び不整方形を呈し、規模は北から65×60cm、85×70cm、70×70cm、深さ20～30cmを計る。柱痕跡は各柱穴で認められ、径20～30cmの円形を呈する。遺物は出土していない。



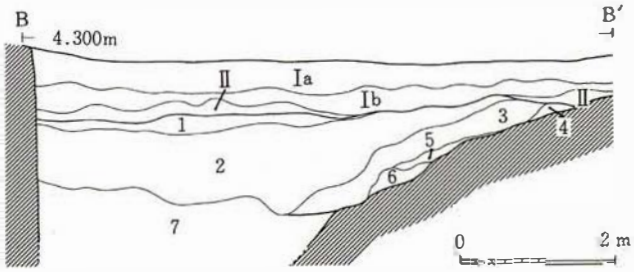
SA01　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	黒褐色	シルト	黄橙色土を斑状に含む
2	暗褐色	〃	〃
3	黒褐色	〃	黄橙色土を多量に含む
4	黄橙色	砂質シルト	暗褐色土を斑状に若干含む
5	暗褐色	シルト	黄橙色土を斑状に若干含む
6	〃	〃	黄橙色土を多く混入
7	黄橙色	砂質シルト	暗褐色土を斑状に若干含む
8	暗褐色	シルト	黄橙色土を斑状に若干含む
9	〃	〃	黄橙色土を多く混入
10	黄橙色	砂質シルト	暗褐色土を斑状に若干含む

第6図　SA01実測図

(3) 溝跡

SD01溝跡　調査区北端を東西方向に延びる溝跡である。SD06・07・09溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。確認できる長さは16.5mで、幅は北壁が調査区外にかかるため不明である。底面は湧水が激しく、しかも壁が崩れやすい砂層



SD01　土層観察表

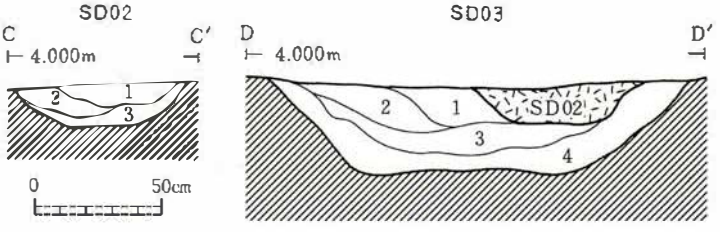
層位	土色	土性	備考
1	暗褐色	シルト	植物遺体を若干含む
2	〃	粘土質シルト	植物遺体を多量に含む
3	〃	シルト	やや砂質
4	褐灰色	砂質シルト	
5	暗褐色	砂質シルト	
6	灰色	〃	
7	〃	〃	緑灰色砂質土を含む

第7図　SD01セクション図

であったため検出できなかった。壁は底面付近から比較的急な立ち上がりをみせるが、中頃で段を有し、その上方は傾斜がゆるやかになる。深さは90cm以上を計る。埋土は基本的に２層に大別される。上層は粘性のある暗褐色シルト層であり、植物遺体を多量に含む。下層は褐灰色シルト層で、底面近くほどグライ化し緑灰色を呈するようになる。遺物は、土師器にはロクロ未使用の杯・甕、ロクロ使用の杯・高台付杯があり、須恵器には底部に「十」のヘラ描きのある杯（第20図５）や蓋・甕・壺がある。このほか、丸瓦、櫛が出土している。

SD02溝跡　調査区西側をＮ―17°―Ｅの南北方向に延びる溝跡である。重複関係からＳＫ01・06土坑より古く、ＳＤ03溝跡より新しい。確認できる長さは約14mで、調査区南西部の西壁寄りで、大きく西側に屈曲し調査区外に延びる。上幅65～90cm、下幅35～60cm、深さは約20cmを計る。底面は平坦に近く、壁は丸味をもってゆるやかに立ち上がる。埋土は２層に大別され、上層は植物遺体を含み粘性に富む。遺物は、土師器にはロクロ未使用の杯・甕、ロクロ使用の甕があり、須恵器には杯・甕・壺がある。このほか、瓦質土器や下駄が出土している。

SD03溝跡　調査区西側をＮ―15°―Ｅの南北方向に延びる溝跡である。重複関係からＳＤ02溝跡より古く、ＳＤ04・09溝跡、ＳＥ04・05井戸跡より新しい。本溝跡は、調査区の南側でゆるやかに弯曲し、発掘基準線にほぼ一致する方向をとって、さらに南へ延びると思われる。しかし、一方では西壁側が西へ屈曲するような状況を呈することから、あるいは西へ延びる溝の存在も考えられる。確認できる長さは約21mで、上幅 140～180cm、下幅50～80cm、深さは約35cmを計る。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は３層に大別され、下層が褐灰色砂質シルト層であり、その上層には植物遺体を多量に含む暗褐色粘土質シルト層が厚く堆積している。また、本溝跡の北側を東西方向に延びるＳＤ01溝跡との間には、幅 1.6mにわたって掘り残した箇所を有している。さらに、この南側には径 1.5m、深さ0.5mの円形の土坑が、ほぼ溝の幅に合わせて掘られており、その南壁沿いには杭が並列に打ち込まれている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、赤焼土器杯、円面硯、平瓦、木製品では折敷、杭が出土している。



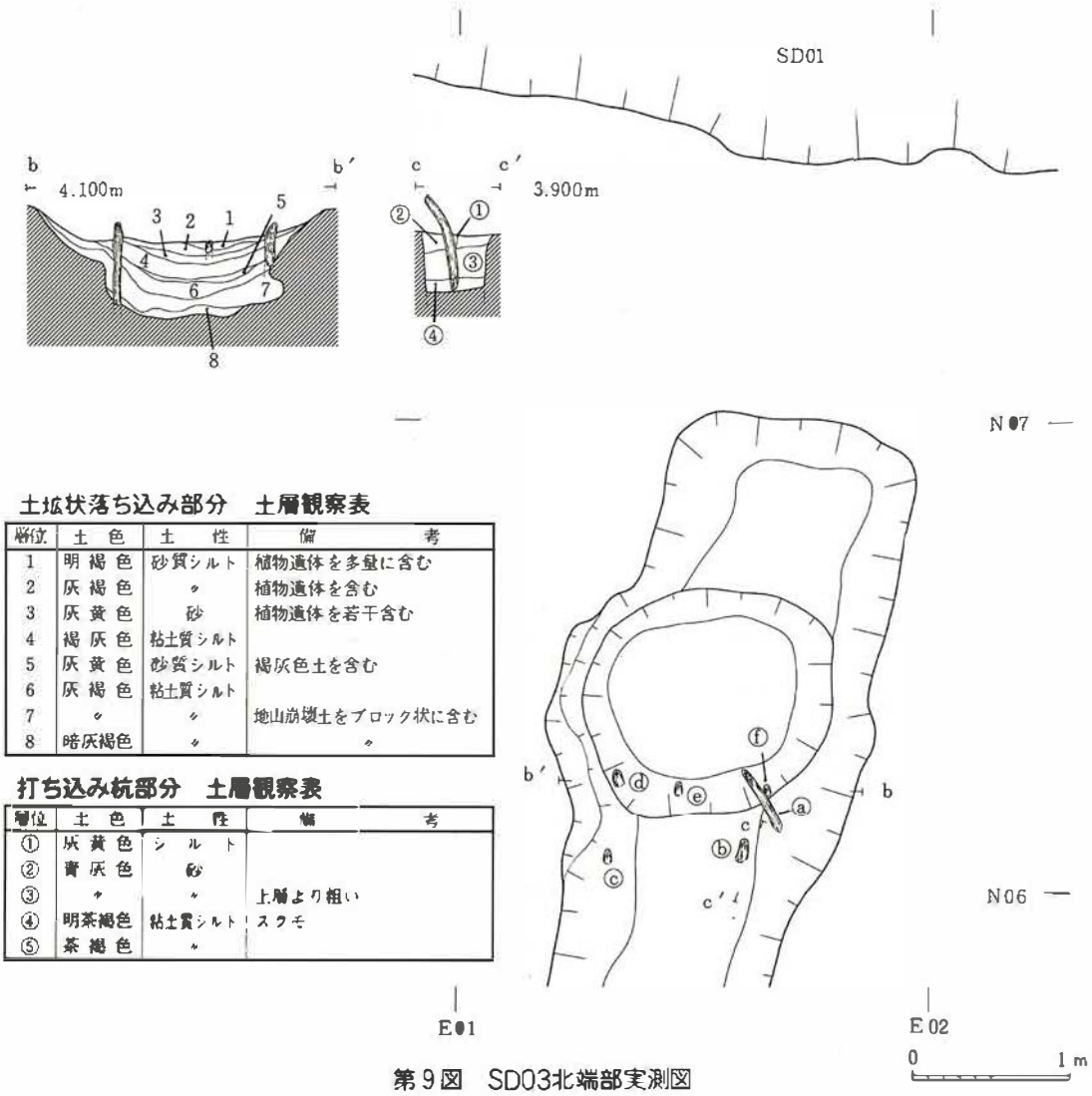
SD02　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	暗灰色	粘土質シルト	植物遺体を含む
2	褐灰色	〃	〃
3	〃	砂質シルト	暗褐色、暗灰色粘土質土を斑状に含む

SD03　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	褐色	粘土質シルト	
2	〃	〃	砂質土を含む
3	暗褐色	〃	植物遺体を多量に含む
4	褐灰色	砂質シルト	地山崩壊土を小ブロック状に含む

第８図　SD02･03セクション図



土坑状落ち込み部分　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	明褐色	砂質シルト	植物遺体を多量に含む
2	灰褐色	〃	植物遺体を含む
3	灰黄色	砂	植物遺体を若干含む
4	褐灰色	粘土質シルト	
5	灰黄色	砂質シルト	褐灰色土を含む
6	灰褐色	粘土質シルト	
7	〃	〃	地山崩壊土をブロック状に含む
8	暗灰褐色	〃	〃

打ち込み杭部分　土層観察表

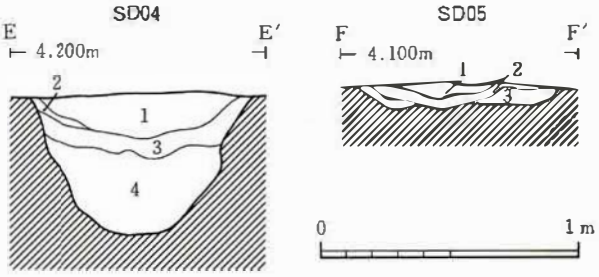
層位	土色	土性	備考
①	灰黄色	シルト	
②	青灰色	砂	
③	〃	〃	上層より粗い
④	明茶褐色	粘土質シルト	スクモ
⑤	茶褐色	〃	

第9図　SD03北端部実測図

SD04溝跡　調査区のほぼ中央部を東西方向に延びる溝跡である。重複関係からＳＤ03溝跡、ＳＫ06・07土坑より古く、ＳＤ07溝跡より新しい。確認できる長さは約12ｍで、上幅80～90cm、下幅40～50cm、深さは約50cmを計る。底面は丸味をおび、壁はやや開き気味に立ち上がる。本溝跡は、西側でゆるやかに弯曲した後、ＳＤ03溝跡に切られているため、その延びは不明である。しかし、弯曲の状況からみてＳＤ03溝跡の位置と重複していた可能性も指摘できる。埋土は３層に細分されるが、すべての層に黄褐色シルトの地山ブロックが多量に混入していることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、土師器杯・甕が出土している。

SD05溝跡　調査区南半部を東西方向に弯曲しながら延びる溝跡である。重複関係からＳＥ01井戸跡より古く、ＳＥ03井戸跡より新しい。確認できる長さは約９ｍで、上幅75～120cm、下幅40～70cm、深さは約10cmを計る。底面はやや丸味をおび、壁はゆるやかに立ち上がる。ま

た、本溝跡の西端は、ＳＥ03井戸跡の西側とほぼ同位置で重複している。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯、瓦質土器のほか、板碑の破片を転用した砥石が出土している。



SD04　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	黄褐色	粘土質シルト	褐色土を含む
2	黄灰褐色	砂質シルト	〃
3	〃	〃	灰褐色土を含む
4	黄褐色	〃	

SD05　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	褐灰色	シルト	暗灰色土を含む
2	暗灰色	粘土質シルト	
3	褐灰色	砂質シルト	暗灰色土と灰黄褐色土を含む

第10図　SD04･05セクション図

ＳＤ06溝跡　調査区のほぼ中央部をN—10°—Eの南北方向に延びる溝跡である。重複関係からＳＫ03・06土坑より古く、ＳＤ07・09溝跡、ＳＫ08・09土坑より新しい。確認できる長さは約22mで、上幅45～70cm、下幅20～35cm、深さは約20cmを計る。断面形は舟底形を呈する。埋土は２層に大別され、上層は灰白色火山灰をブロック状に含む灰褐色シルト層、下層は褐灰色粘土質シルト層である。遺物は、土師器にはロクロ未使用の杯・甕、ロクロ使用の杯・甕があり、須恵器には杯・甕がある。このほか平瓦が出土している。

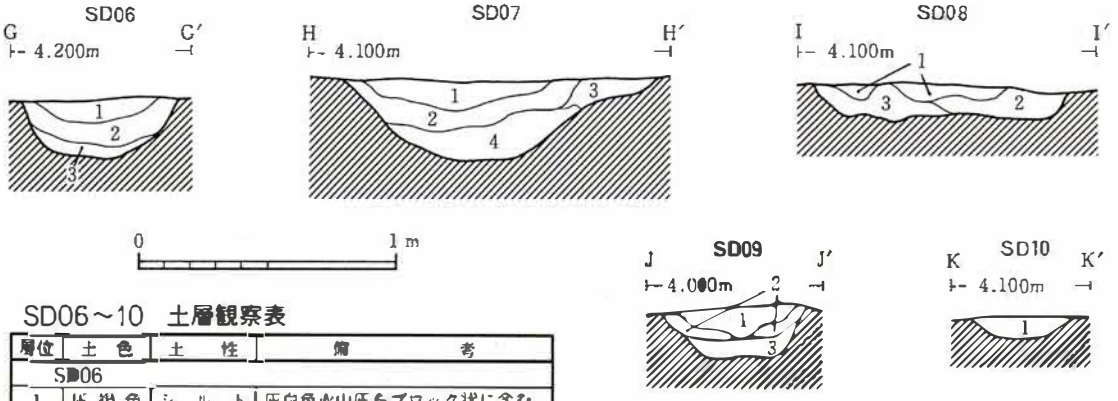
ＳＤ07溝跡　調査区中央部を南北方向に延びる溝跡であり、中央でわずかに蛇行する。重複関係からＳＤ01・04・06溝跡、ＳＫ02・08・09土坑、ＳＥ02・03井戸跡より古く、ＳＤ08・09溝跡より新しい。確認できる長さは約22mで、上幅80～130cm、下幅40～60cm、深さは約30cmを計る。断面形は舟底形を呈し、西壁は東壁に比べ立ち上がりが急である。埋土は２層に大別され、上層は灰白色火山灰を粒状に若干含む褐灰色シルト層、下層は灰黄褐色砂質シルト層である。遺物は、土師器にはロクロ未使用の甕・甑、ロクロ使用の杯・甕があり、須恵器には杯・高台付杯・甕・壺がある。このほか丸瓦が出土している。

ＳＤ08溝跡　調査区中央部を南北方向に延びる溝跡で、南側でわずかに蛇行する。重複関係からＳＤ07溝跡、ＳＥ02・03井戸跡、ＳＫ05・07土坑より古く、ＳＤ10溝跡より新しい。確認できる長さは約22mで、上幅75～140cm、下幅50～90cm、深さは約15cmを計る。底面はほぼ平坦であり、壁は丸味をもって立ち上がる。埋土は２層に大別され、上層は暗褐色シルト層、下層は灰白色火山灰を粒状に若干含む灰黄褐色砂質シルト層である。遺物は、土師器の小破片と丸瓦が出土している。

ＳＤ09溝跡　調査区西側を南北方向にゆるやかに蛇行しながら延びる溝跡で、南側でＳＤ07溝跡と重複する。ＳＤ01～03・06・07溝跡、ＳＫ06土坑より古く、ＳＤ10溝跡より新しい。確認できる長さは約22mで、上幅45～55cm、下幅25～30cm、深さは約20cmを計る。断面形は逆台

形に近く、壁の立ち上がりは比較的急である。埋土は2層に大別され、上層は褐灰色シルト層、下層は黄橙色砂質シルト層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。

ＳＤ10溝跡　調査区西半部を南北方向に斜行する溝跡である。北側と南側では連続しないが、位置や方向、埋土等の状況から同一の溝跡としてとらえた。ＳＤ03・08溝跡、ＳＥ04・05井戸跡と重複関係にあり、これらより古い。確認できる長さは約9ｍで、上幅40～50cm、下幅20～30cm、深さは約10cmを計る。断面形は舟底形を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は黄橙色砂質シルト層からなる。遺物は出土していない。



SD06～10　土層観察表

層位	土色	土性	備考
SD06			
1	灰褐色	シルト	灰白色火山灰をブロック状に含む
2	〃	〃	〃
3	褐灰色	粘土質シルト	灰白色火山灰、地山崩壊土を斑状に含む
SD07			
1	褐灰色	シルト	酸化鉄・マンガン粒を含む
2	〃	〃	灰白色火山灰を若干含む
3	灰黄褐色	砂質シルト	
4	にぶい黄褐色	〃	褐灰色土を含む
SD08			
1	暗褐色	シルト	灰黄褐色砂質土を含む
2	灰黄褐色	砂質シルト	灰色砂質土と互層に堆積
3	〃	〃	灰白色火山灰を斑状に若干含む
SD09			
1	褐灰色	シルト	黄橙色砂質土を斑状に含む
2	〃	〃	黄橙色砂質土と互層に堆積
3	黄橙色	砂質シルト	褐灰色土を斑状に含む
SD10			
1	黄橙色	砂質シルト	褐灰色土を斑状に含む

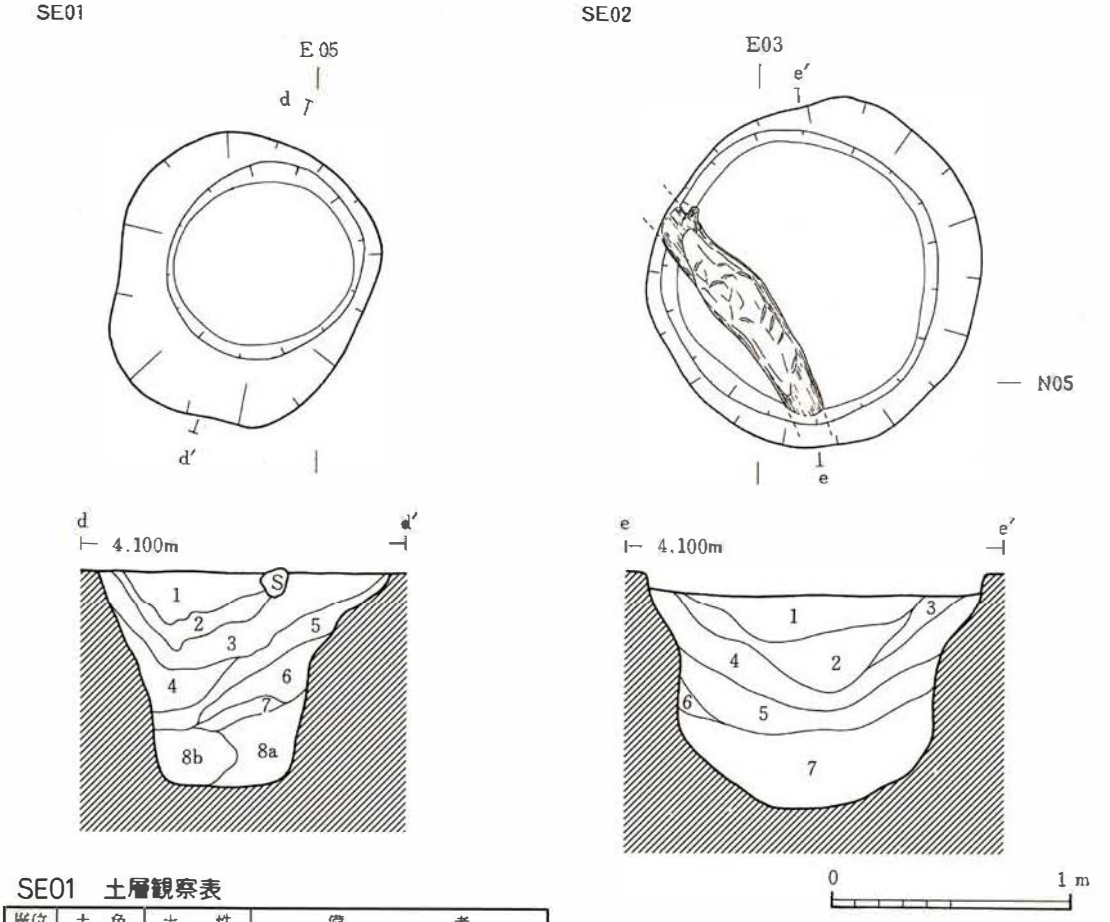
第11図　SD06～10セクション図

(4)　井戸跡

ＳＥ01井戸跡　調査区のほぼ中央部、東壁近くに位置する。ＳＤ05溝跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形は略円形を呈し、断面形は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中央付近より外傾するものである。規模は直径2.15m、底径 0.5m、深さは 0.9m を計る。埋土の状況についてみると、下層は一部グライ化した黒褐色シルト質粘土層が堆積しており、中頃にはしまりの弱い黒褐色粘土質シルト層が、南側より流れ込んだ状況を示している。上層には暗褐色シルト層等がレンズ状に堆積している。遺物は、土師器片、須恵器杯、漆器が出土している。

ＳＥ02井戸跡　調査区の中央よりやや北側に位置する。ＳＤ07・08溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。平面形はほぼ円形を呈する。底面は丸底状で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、上方では内弯気味に開く。規模は直径 1.5m、深さ1ｍを計る。埋土の状況についてみると、上層は植物遺体を多量に含み、下層に比べさほど粘性に富まず、しまりも弱いのが特徴である。

堆積の仕方から自然の埋没と考えられる。なお、底面付近で流木が認められた。これは底面の形態に合わせて加工を施していることや、両端が基盤層中に入り込んでいることから、井戸埋没時に流入したものではなく、旧河川に伴うものとみられる。遺物は、土師器杯、須恵器杯・甕が出土している。



SE01　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	褐色	シルト	カーボンを含む
2	暗灰色	〃	地山崩壊土・マンガン粒を含む
3	暗褐色	〃	カーボンを含む
4	黒褐色	粘土質シルト	植物遺体を多量に含む
5	〃	〃	〃
6	〃	〃	〃
7	青灰色	〃	グライ化
8a	黒褐色	シルト質粘土	植物遺体を多量に含む
8b	青灰色	〃	グライ化

SE02　土層観察表

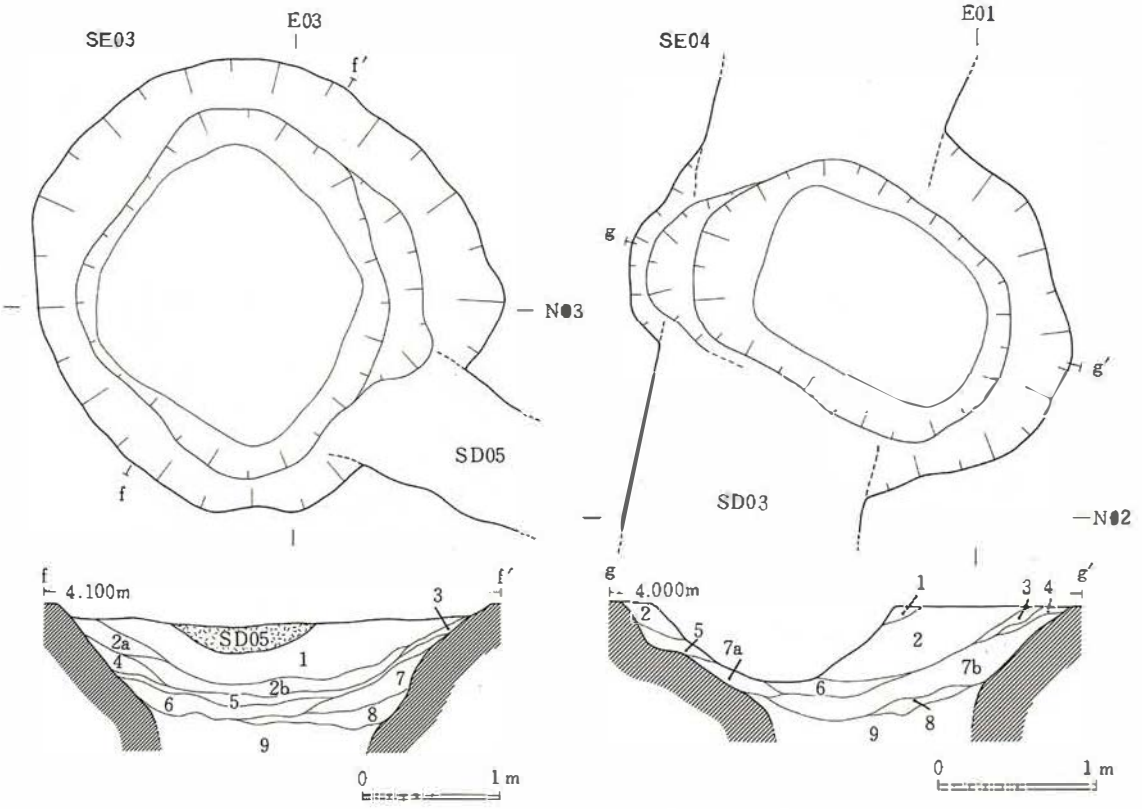
層位	土色	土性	備考
1	褐灰色	シルト	
2	暗褐色	粘土質シルト	植物遺体を含む
3	褐灰色	〃	
4	暗褐色	〃	植物遺体を含む
5	灰色	〃	
6	緑灰色	砂質シルト	
7	黒色	粘土質シルト	

第12図　SE01・02実測図

ＳＥ03井戸跡　調査区のほぼ中央に位置する。重複関係からＳＤ05溝跡より古く、ＳＤ07・08溝跡より新しい。平面形は略円形を呈し、断面形は湧水のため完掘していないが、おそらくは底面から円筒形に立ち上がり、上方で大きく外傾するものと思われる。規模は径 3.0～3.2ｍ、深さは１ｍ以上である。埋土の状況についてみると、中頃は粘土質シルト層と砂質シルト

層が互層に堆積しており、その上方には、植物遺体を多量に含むしまりの弱い暗褐色シルト層が認められる。この堆積のあり方から自然に埋没したものと考えられる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、瓦が出土している。

ＳＥ04井戸跡　調査区の南半部、西壁近くに位置する。重複関係からＳＤ03溝跡より古く、ＳＤ10溝跡より新しい。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は湧水のため完掘はしていないが、ＳＥ03井戸跡と同様の形態をとるものと推察される。規模は長軸 2.8m、深さは 0.8m 以上である。埋土の状況についてみると、砂質シルト層と粘土質シルト層が互層になっており、最上層には灰白色火山灰層が観察された。堆積のあり方から自然埋没と考えられる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯、曲物が出土している。



SE03　土層観察表

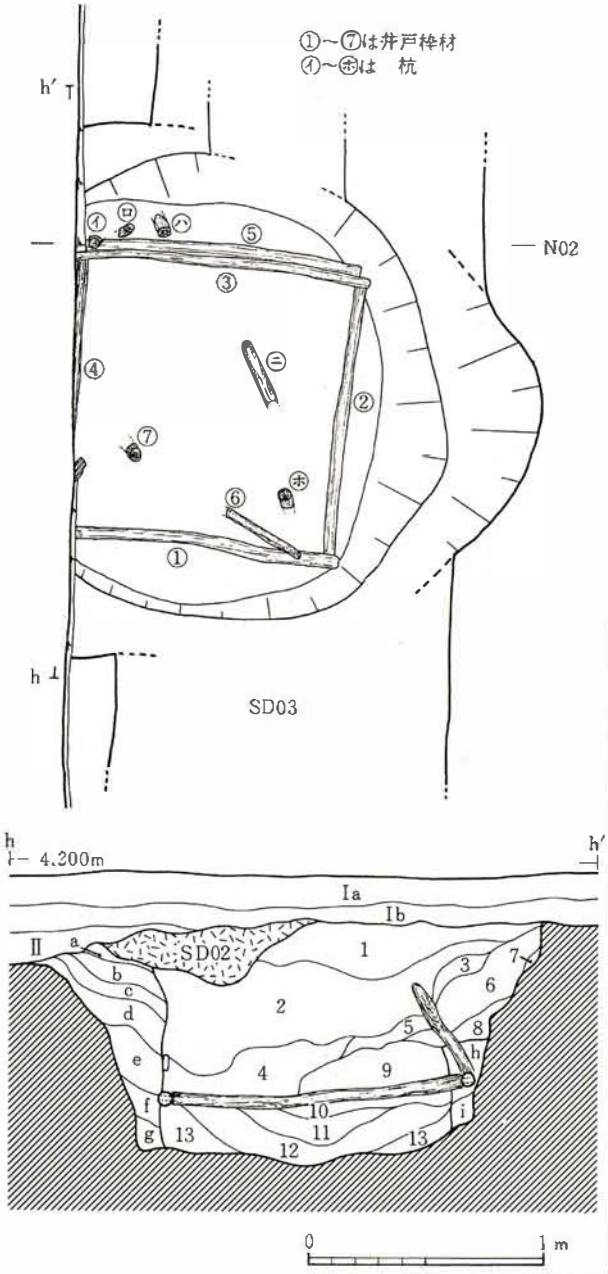
層位	土色	土性	備考
1	灰褐色	シルト	
2a	〃	〃	
2b	暗褐色	〃	植物遺体を多量に含む
3	褐灰色	砂質シルト	
4	〃	シルト	
5	暗灰色	粘土質シルト	植物遺体を含む
6	黒灰色	〃	植物遺体をわずかに含む
7	暗灰色	砂質シルト	
8	黒色	粘土質シルト	
9	黒灰色	〃	

SE04　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	灰白色	シルト	火山灰層
2	灰色	砂質シルト	灰白色火山灰を斑状に含む
3	灰黄褐色	〃	
4	灰色	〃	
5	にぶい灰色	〃	
6	暗灰色	粘土質シルト	植物遺体を若干含む
7a	褐灰色	〃	
7b	〃	砂質シルト	
8	黒灰色	〃	
9	にぶい緑灰色	粘土質シルト	黒灰色土を含む

第13図　SE03・04実測図

ＳＥ05井戸跡　調査区の南半部、西壁ぎわに位置する。重複関係からＳＤ03溝跡より古く、ＳＤ10溝跡より新しい。本井戸跡は井戸掘り方、井戸枠より構成され、井戸枠から求められる方向はN －6°－ Ｅである。井戸掘り方の上部平面形は、西側が調査区外にかかることや、ＳＤ03溝跡に破壊されていることにより明確に把握しがたいが、およそ東西方向の楕円形を呈していたものと考えられる。断面形は逆台形で、その深さは１ｍを計る。井戸枠は円形の底面より約30cmの高さに、棒状の丸木材を正方形に組んだものである。また、この井戸枠に関連するものとして、井戸枠周辺に巡らした杭も検出している。いずれの杭も横倒しの状態であり、打ち込んだままの原位置を保っていない。掘り方内の埋土を断面で観察すると、南側では灰褐色シルト層と浅黄色シルト層が交互に積まれているのに対し、北側では上位が打ち込み杭とともに崩落している状況が観察される。また、井戸枠内の埋土は、井戸枠の上下で異なった堆積の仕方をしている。下方の層はグライ化した砂質及び粘土質シルト層で、レンズ状の自然堆積である。一方、上方の層は地山ブロックを多量に含む



SE05　土層観察表

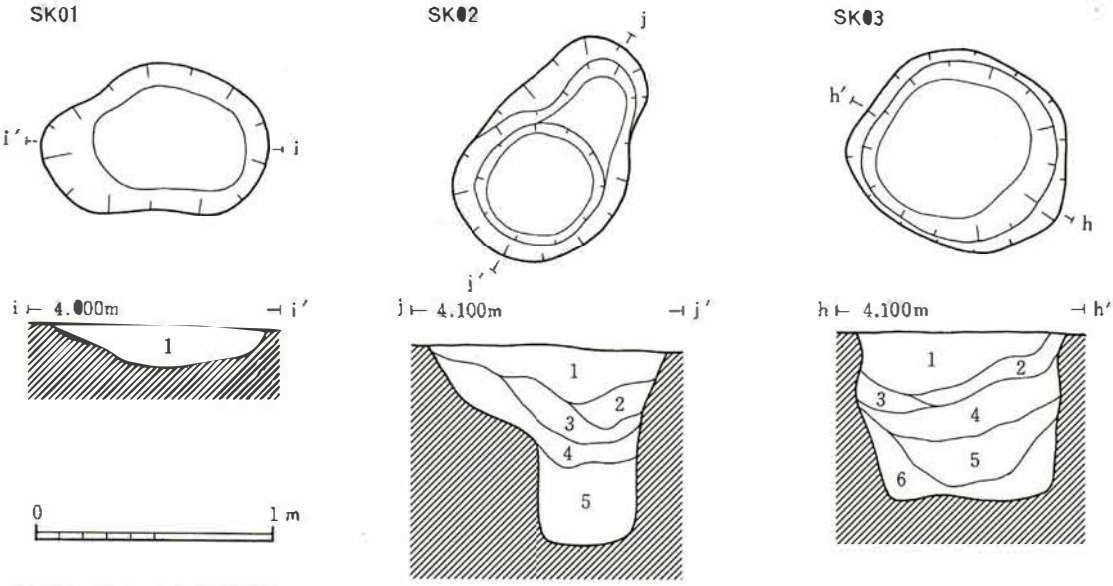
層位	土色	土性	備考
井戸枠内堆積土			
1	褐色	シルト	地山粒を含む
2	浅黄色	砂質シルト	
3	褐灰色	シルト	
4	〃	砂質シルト	グライ化
5	〃	粘土質シルト	地山粒を含む
6	〃	砂質シルト	崩落土
7	浅黄色	〃	〃
8	暗褐灰色	粘土質シルト	
9	青灰色	砂質シルト	グライ化
10	灰褐色	シルト	地山粒を含む
11	青灰色	砂質シルト	
12	〃	〃	地山粒を含む
13	〃	粘土質シルト	地山粒を多く含む
掘り方埋土			
a	黄色土	シルト	
b	灰褐色	〃	
c	浅黄色	粘土質シルト	
d	灰褐色	〃	
e	暗灰褐色	砂質シルト	グライ化
f	青灰色	シルト	〃
g	灰黒色	シルト質粘土	崩落土
h	暗褐灰色	粘土質シルト	
i	青灰色	〃	

第14図　SE05実測図

砂質シルト層であり、その堆積のあり方から、一手に埋め戻された可能性がある。次に井戸枠内の遺物出土状況についてみると、上方の層からは、ほとんど遺物が出土しなかったのに対して、下方の層からは木製品を主体とした遺物の出土が顕著であった。遺物は、土師器杯、丸瓦、木製品では曲物、盤、箸状製品、串状製品、斎串、板状製品、井戸枠材、杭が出土している。このうち、正方形に組み合うもの以外の井戸枠材と杭は、散乱した状況で検出している。前者の⑤～⑦（第31図４、第32図１・７）については、上部の井戸枠が崩落したものとみられ、枠組みが２段以上存在したことを示している。また、㋺・㋭（第33図４、第32図４）の杭については、井戸枠の組み合わせ部に打ち込んであった補強材とも考えられる。本井戸跡は、埋土のあり方、遺物の出土状況から、廃絶後に井戸枠が壊され、北側より埋め戻しが行われたと考えておきたい。

(5) 土坑

ＳＫ01土坑　調査区北西部、ＳＤ02溝跡の北端に位置する。ＳＤ02・03溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。平面形は不整楕円形を呈する。底面は平坦に近く、壁は丸味をもってゆるやかに立ち上がる。規模は長軸95cm、短軸60cm、深さ約20cmを計る。遺物の出土は少量で土師器甕、須恵器杯がある。



SK01～03　土層観察表

層位	土色	土性	備考
SK01			
1	褐灰色	シルト	明黄褐色土と灰色砂質土を含む
SK02			
1	褐灰色	シルト	明黄褐色土をブロック状に含む
2	〃	〃	明黄褐色土と灰色砂質土を含む
3	灰色	〃	
4	〃	〃	明黄褐色砂質土をブロック状に含む
5	暗灰色	粘土質シルト	緑灰色粘土質土を斑状に含む

層位	土色	土性	備考
SK03			
1	灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色土を多量に含む
2	褐灰色	〃	灰白色火山灰を斑状に含む
3	灰色	〃	
4	浅黄色	粘土質シルト	黄褐色と黒色粘土質土をブロック状に多く含む
5	黒色	〃	
6	〃	〃	

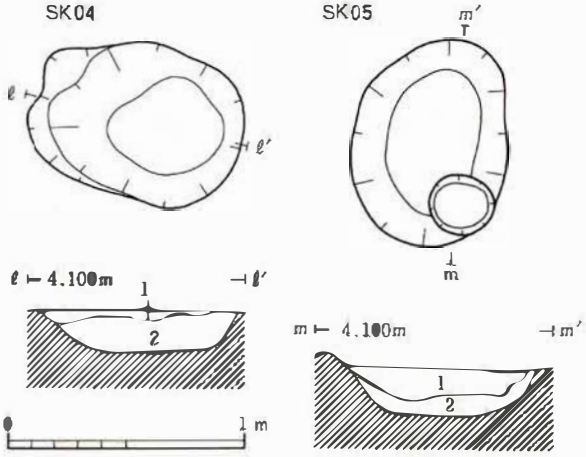
第15図　SK01～03実測図

ＳＫ02土坑　調査区北側の中央付近に位置する。ＳＤ07溝跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形は検出面では不整楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は円筒状に立ち上がるが、北壁側では中頃に段を有し、その上方はなだらかに開く。規模は長軸 100cm、短軸65cm、深さ約80cmを計る。埋土は２層に大別され、上層は明黄褐色シルト等をブロック状に多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が強い。遺物は出土していない。

ＳＫ03土坑　調査区中央部やや北寄りに位置する。ＳＤ06・07溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。平面形はほぼ円形、断面形は円筒形を呈する。規模は径80cm、深さ70cmを計る。埋土は３層に大別される。下層は黒色と浅黄色の粘土質シルト層が互層になる自然堆積土である。一方、上層は黄褐色シルト等をブロック状に多量に含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物は少量で、土師器片、赤焼土器杯がある。

ＳＫ04土坑　調査区北東部に位置する。平面形は不整楕円形を呈する。底面は平坦に近く、壁は丸味をもってゆるやかに立ち上がる。規模は長軸85cm、短軸65cm、深さ約20cmを計る。埋土は２層に分けられ、いずれも黄褐色シルトと褐灰色粘土質シルトが混じり合うことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は出土していない。

ＳＫ05土坑　調査区南東部に位置する。ＳＤ08溝跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形はほぼ楕円形を呈する。底面はやや平坦であり、壁は丸味をもって立ち上がる。規模は長軸90cm、短軸65cm、深さ約25cmを計る。遺物の出土は少量で、土師器杯、赤焼土器杯がある。

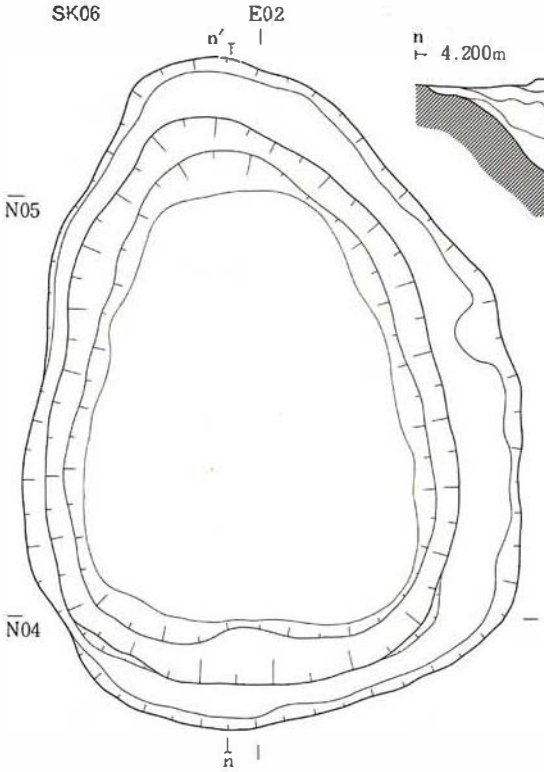


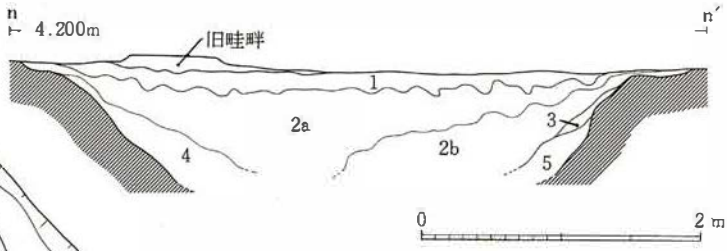
SK04・05　土層観察表

層位	土　色	土　性	備　考
SK04			
1	褐灰色	粘土質シルト	褐色土と地山崩壊土を含む
2	黄灰褐色	砂質シルト	地山崩壊土を多量に含む
SK05			
1	褐灰色	シルト	灰白色火山灰を斑状に若干含む
2	にぶい明黄褐色	砂質シルト	褐灰色土をブロック状に含む

第16図　SK04・05実測図

ＳＫ06土坑　調査区のほぼ中央に位置する大形の土坑である。ＳＤ04・07・08溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。平面形は不整楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈すると思われるが、湧水が激しいため底面の状態は明確には把握できなかった。規模は長軸 4.8m、短軸 3.5m、深さ 0.7m 以上である。埋土は５層に細分されるが、大部分を地山ブロックを多量に含む灰褐色シルト層が占める。このことから、本土坑は人為的に埋め戻された可能性が強い。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、中世陶器があり、木製品では折敷と下駄が出土している。





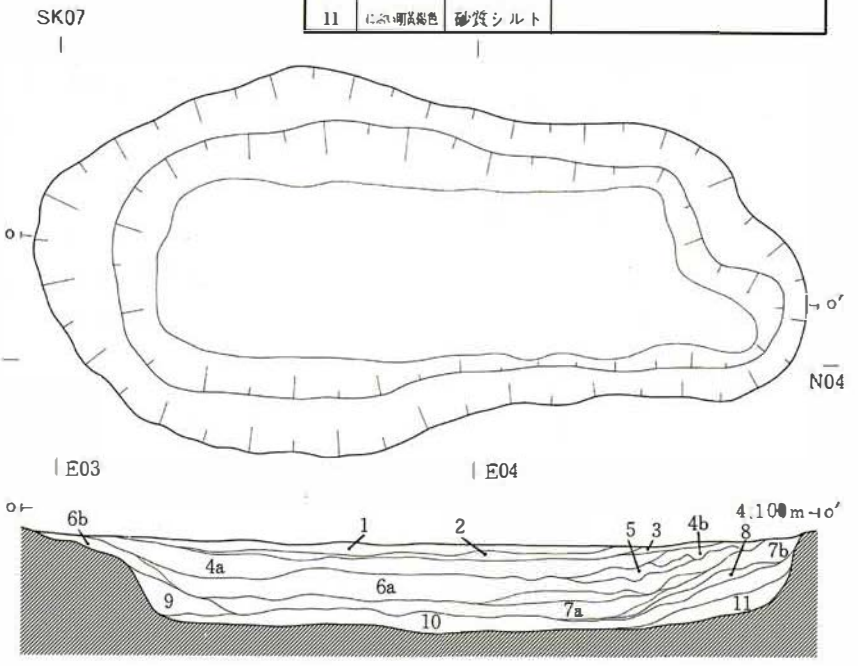
SK06　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	黒褐色	シルト	植物遺体・カーボン粒を含む
2a	灰褐色	砂質シルト	黄褐色の地山ブロックを多量に含む
2b	〃	〃	グライ化
3	褐色	粘土質シルト	
4	〃	砂質シルト	グライ化
5	青灰色	シルト質砂	〃

SK07　土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	褐灰色	砂質シルト	
2	黒色	シルト	木炭層
3	褐灰色	砂質シルト	木炭を含む
4a	暗灰色	粘土質シルト	
4b	〃	砂質シルト	
5	黒褐色	粘土質シルト	
6a	暗灰色	〃	植物遺体を含む
6b	〃	砂質シルト	
6c	〃	粘土質シルト	植物遺体を含む
7a	灰黄色	〃	〃
7b	灰色	砂質シルト	
8	黒色	粘土質シルト	
9	〃	〃	
10	〃	〃	
11	にぶい明黄褐色	砂質シルト	

ＳＫ07土坑　ＳＫ06土坑の東側に位置する大形の土坑である。ＳＤ04・07・08溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。平面形は東西方向に長い不整楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は丸味をもって立ち上がり、比較的急な傾斜をもつ。規模は長軸 5.5m、短軸2.75m、深さ約 0.7m を計る。埋土は11層に細分さ

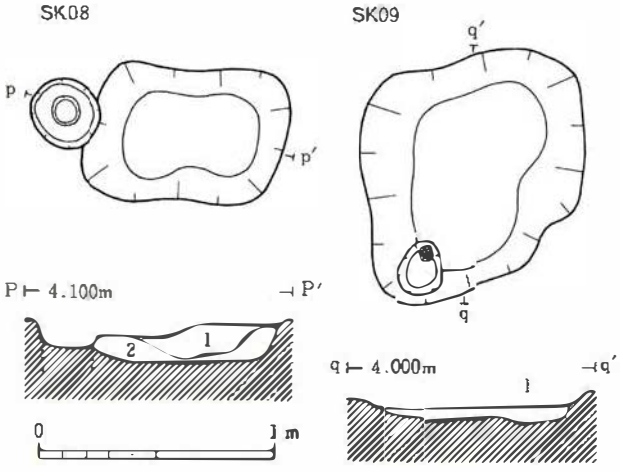


第17図　SK06・07実測図

れる。上層には木炭を多量に含む薄い層が観察でき、中頃には植物遺体を含む暗灰色粘土質シルト層が堆積している。下層は黒色粘土質シルト層からなる。遺物は、土師器ではロクロ未使用の杯・甕、ロクロ使用の杯・甕、須恵器では杯・甕がある。このほか、赤焼土器杯、円面硯木製品では自在鉤、杭が出土している。

ＳＫ08土坑　調査区南西部に位置する。重複関係からＳＤ06溝跡より古くＳＤ07溝跡より新しい。平面形は不整方形、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸85cm、短軸60cm、深さ約20cmを計る。遺物は、土師器ではロクロ未使用の杯、須恵器は杯が出土している。

ＳＫ09土坑　調査区南西部南壁寄りに位置する。重複関係はＳＫ08土坑と同様である。平面形は不整方形を呈する。底面は平坦に近いが若干の凹凸がみられる。規模は長軸 100cm、短軸95cm、深さ約10cmを計る。遺物は出土していない。



SK08・09　土層観察表

層位	土色	土性	備考
SK08			
1	褐灰色	シルト	灰白色火山灰を斑状に若干含む
2	にぶい灰色	〃	〃
SK09			
1	灰色	シルト	灰白色火山灰と灰黄褐色土を斑状に若干含む

第18図　SK08・09実測図

3．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、中世陶器、瓦質土器、硯、瓦、木製品、石製品、金属製品等である。この中では、土師器と須恵器の出土量が大半を占めるが、両者とも器形がわかるものはごくわずかである。他の遺物の出土量はさらに少なく例外的に木製品において、見るべきものが比較的多く出土している。

(1)　土師器

土師器には、杯、高台付杯、甕、甑の器種がある。全体の器形がわかるものが少ないため、ここでは、製作技法や特徴によって分類することは行わず、図示できたものについて、個々に記述することにする。

〈杯〉

製作の際に、ロクロを使用しないものと、使用したものがある。出土量は圧倒的に後者が上まわる。後者はすべて内面にヘラミガキ・黒色処理を施しているものである。底部は回転糸切りによって切り離し、再調整をもたないものが多い。杯で図示できたものは４点である。

第19図１　ＳＤ01溝跡より出土したロクロ未使用の杯である。半円球を呈するもので、丸底の底部から、内弯しながら立ち上がる体部にかけて、境をもたずに移行する。口縁部を欠くため、全体の器形は不明である。器厚が６～８mmと比較的厚手であり、胎土に砂粒を多く含むため、特に底部付近では、器面が粗い感じを受ける。器面調整は体部の内外面にヘラミガキ、底部外面にヘラケズリが施されている。また、内外面ともに朱を塗った痕跡が認められる。

第19図２　ＳＤ06溝跡より出土したロクロ未使用の杯である。丸底を呈し、体部は内弯して立ち上がる。口縁部で短く外反し、内面にかるい稜を有するものである。器面調整は磨滅のため明瞭ではないが、外面には口縁部でヨコナデ、体部でヘラミガキ、底部でヘラケズリが施されている。内面には口縁部でヨコナデ、体部から底部にかけてはヘラナデが施されている。また、外面に朱を塗った痕跡がわずかに認められる。

第20図２　ＳＤ06溝跡より出土したロクロ使用の杯である。底部は回転糸切りによって切り離した後、再調整をもたない。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部で外反するものである。

第20図１　ＳＫ07土坑より出土したロクロ使用の杯である。口径に対する底径の比が小さいもので、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。底部の切り離し技法等は、磨滅のため不明である。

〈高台付杯〉

全て破片のため図示できたものはない。内面はヘラミガキ・黒色処理を施している。

〈甕〉

土師器の出土量の約６割を占めるが、全て破片のため図示できたものは少ない。製作の際にロクロを使用しないものと、使用したものがあり、両者の出土量の比は２：１である。

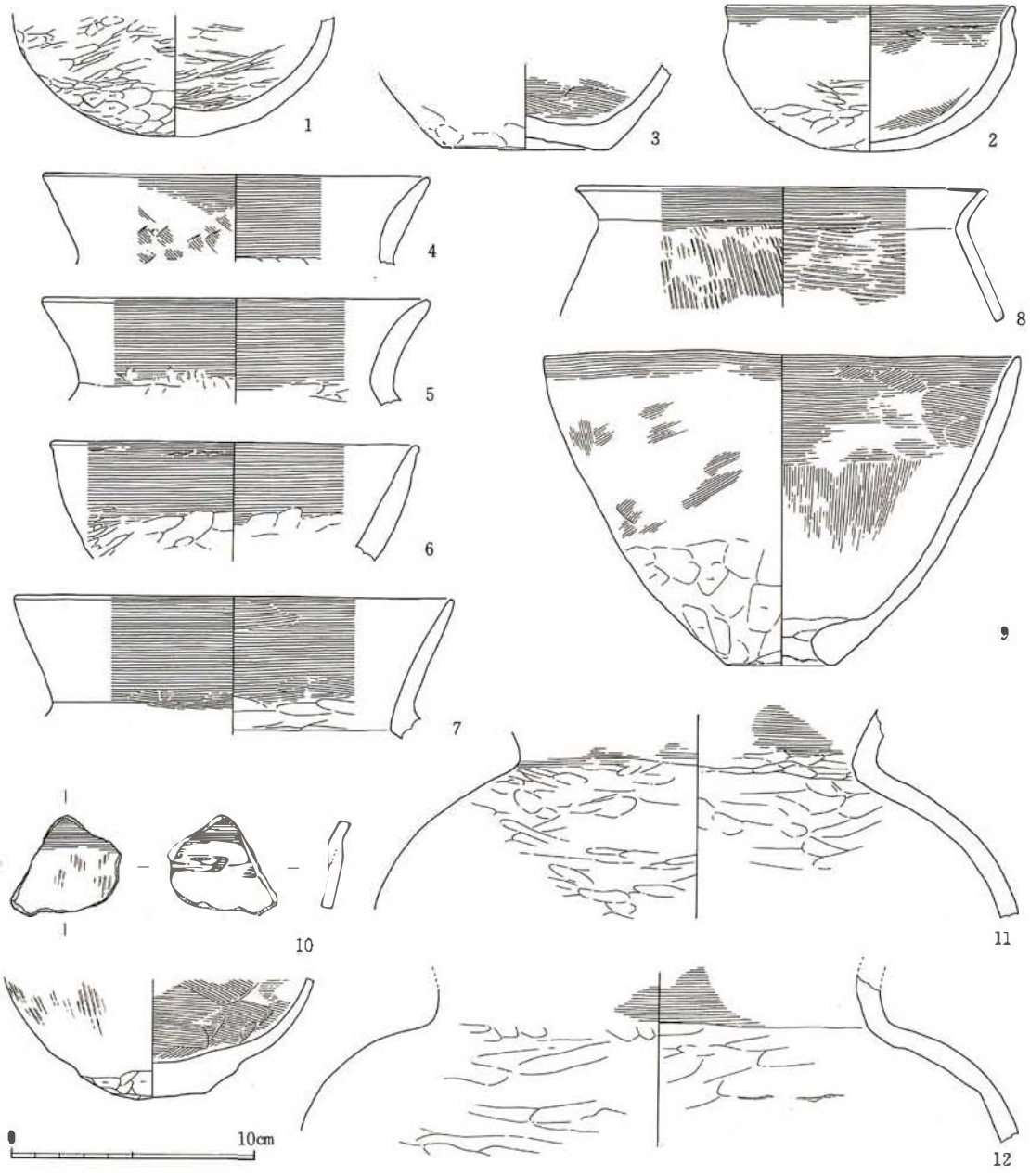
ロクロ未使用のものの口縁部資料には、外傾気味に立ち上がり、比較的長い口縁をもつもの（第19図６・７）と、外反する短い口縁をもつもの（第19図４・５）がある。いずれも単純口縁を呈し、器面調整は内外面にヨコナデが施されている。体部資料には、内外面ともナデ状のヘラミガキが施されているものが多い。また、１点のみの資料であるが、短く外反する口縁をもち、体部の内外面にハケメが施される小形のものがある（第19図８）。

ロクロ使用のものには、体部内面において横方向へのハケメが施されているものがある。

〈甑〉

第19図９　ＳＤ07溝跡より出土したロクロ未使用の甑である。単孔のもので、底部の円孔は径約 2.5cmを計る。体部は内弯気味に立ち上がり、全体的には鉢形を呈する。口縁は単純口縁である。器面調整は、外面には口縁部でヨコナデ、体部下半でヘラケズリが施されている。内面には口縁部でヨコナデ、体部で縦方向へのヘラナデが施されている。

〈器種不明〉



No.	種別	器形	遺構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	土師器	椀	SD01	体部ヘラミガキ 底部ヘラ削り	ヘラミガキ				内外面に朱痕
2	〃	〃	SD06	口縁ヨコナデ 底部ヘラ削り 体部ヘラミガキ	口縁ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	(11.8)		6.0	外面にわずかに朱痕
3	〃	甕	〃	体～底部ヘラ削り	ヘラナデ		7.0		
4	〃	〃	SD01	口縁ヨコナデ 頸部ヘラナデ	ヨコナデ	(15.9)			
5	〃	〃	SD07	ヨコナデ	〃	(16.0)			
6	〃	〃	SK07	口縁ヨコナデ →ヘラミガキ及びヘラ削り	〃	(15.1)			
7	〃	〃	SD07	口縁ヨコナデ 頸部一部ヘラナデ	口縁ヨコナデ 頸部ヘラミガキ	(18.0)			
8	〃	〃	SK07	口縁ヨコナデ 体部ハケメ	口縁ヨコナデ 体部ハケメ	(17.0)			
9	〃	甑	SD07	口縁ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラ削り	口縁ヨコナデ 体部ヘラナデ	(19.6)	(4.6)	12.2	
10	〃	不明	〃	頸部ヨコナデ 体部ハケメ 底部ヘラ削り	頸部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ				
11	〃	甕	〃	頸部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	頸部ヨコナデ 体部ヘラミガキ				
12	〃	〃	SD06	頸部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	頸部ヨコナデ 体部ヘラミガキ				

第19図　出土遺物(土師器)

第19図10　ＳＤ07溝跡より出土したロクロ未使用のものである。同一個体のものと思われる口縁部資料と底部資料があるが、接合部分がないため全体の器形は不明である。底部はヘラケズリによって粗く削り出し、体部の曲線に比べやや突出した感じのする丸底を呈する。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、内面にかるい稜を有する。全体的には鉢形状を呈するものと思われる。器面調整は、外面には口縁部でヨコナデ、体部では縦方向へのハケメが施されている。内面には口縁部でヨコナデ、体部から底部にかけてはヘラナデが施されている。

(2)　須恵器

須恵器には、杯、高台付杯、蓋、甕、壺の器種がある。この中では、杯と甕の出土量が占める割合が圧倒的に高い。両者の比較では杯の出土量が若干上まわる。

〈杯〉

須恵器の出土量の約４割を占める。全体の器形が復元できるものがごくわずかなため、法量によって分類することはできない。底部の切り離しや再調整の技法には、(a)切り離し不明で、回転ヘラケズリ調整を施しているもの。(b)切り離し不明で、手持ちヘラケズリ調整を施しているもの。(c)回転ヘラ切りの後、無調整のもの。(d)回転糸切りの後、無調整のものがある。このうち、(c)と(d)が底部資料の中で占める割合は、それぞれ４割と３割であり、(a)と(b)の資料数はほぼ同数である。出土した杯で図示できたものは３点である。

第20図４　ＳＤ02溝跡より出土している。底部は回転ヘラ切りの後、無調整のものである。体部は内弯気味に外傾して立ち上がる。

第21図３　第Ib層出土のものである。底部の切り離し技法は不明であり、再調整として底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整を施している。体部は内弯気味に立ち上がる。

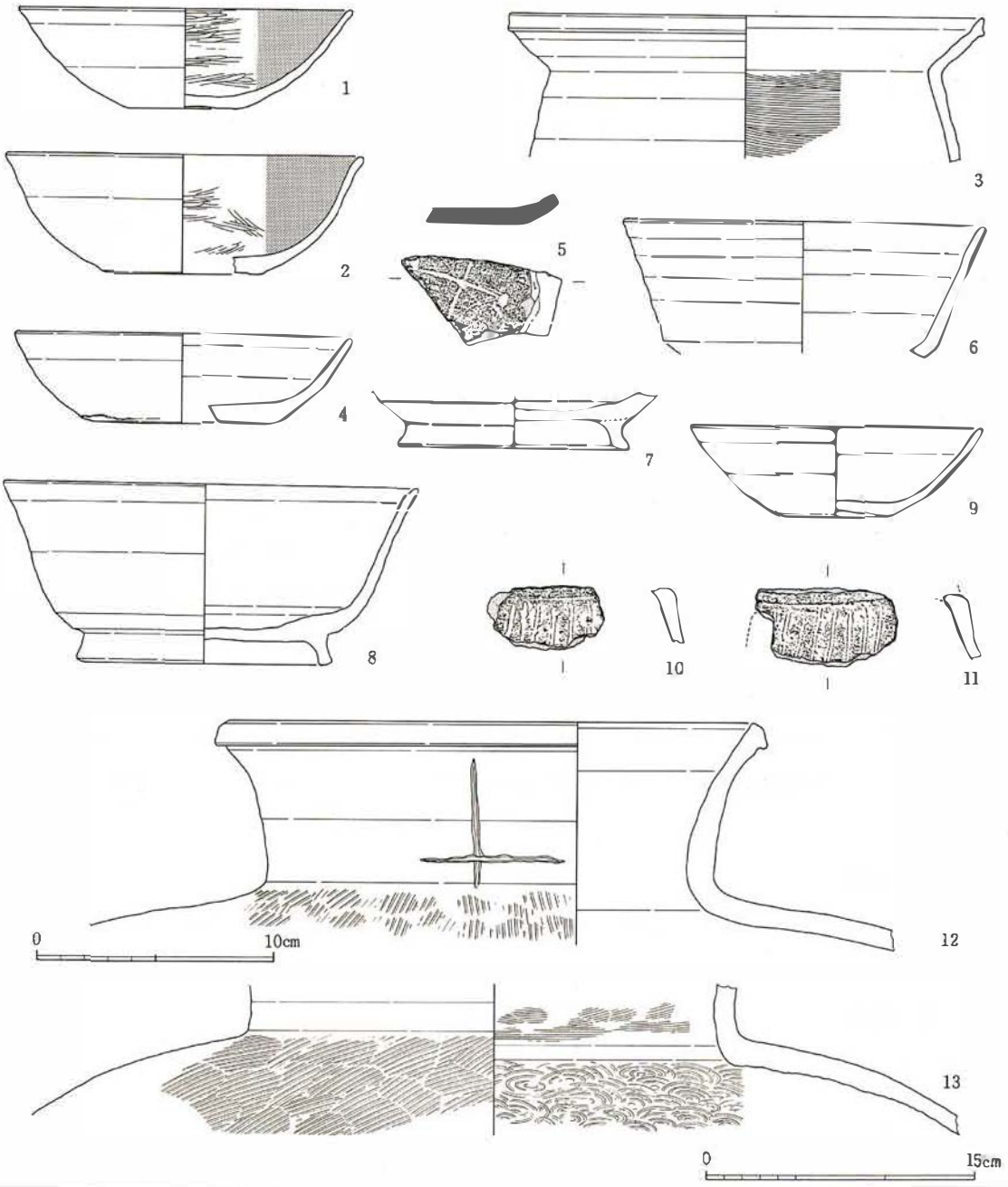
〈高台付杯〉

図示できたものは２点である。

第20図８　ＳＤ07溝跡より出土している。口径に対する器高の割合が大きいものである。底部は回転ヘラ切りによる切り離しの後、底部周縁から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整が施されているが、高台貼り付けの際のロクロナデ調整によって消されているため、その痕跡はわずかに確認できる程度である。体部は内弯気味に外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。高台は「ハ」の字状に外側に開くものである。

第20図７　ＳＤ07溝跡より出土している。底部全面に回転ヘラケズリ調整を施して、切り離し痕跡が残らないものである。高台は端部で外側に大きく張り出すもので、貼り付け後、丁寧にロクロナデ調整している。

〈蓋〉



No.	種別	器形	遺構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	SK07	ロクロナデ、底部切離し不明	ヘラミガキ・黒色処理	(14.2)	4.4	4.2	
2	〃	〃	SD06	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(15.1)	(7.0)	4.9	
3	〃	甕	SE04	ロクロナデ	ロクロナデ、体部ヘラナデ	(19.9)			
4	須恵器	杯	SD02	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	(14.3)	(7.4)	4.8	
5	〃	杯	SD01	ロクロナデ、底部手持ちヘラ削り	〃				底部外面にヘラ描き「＋」
6	〃	高台付杯か	SD07	ロクロナデ	〃	(15.2)			
7	〃	高台付杯	〃	ロクロナデ、底部回転ヘラ削り	〃		(9.8)		
8	〃	〃	〃	ロクロナデ、体～底部回転ヘラ削り	〃	(17.6)	10.7	7.6	
9	赤焼土器	杯	SK07	ロクロナデ、底部回転糸切り	〃	(12.2)	(4.6)	3.8	
10		円面硯	〃	ロクロナデ	〃				脚部に平行線文と透し有り
11		〃	SD03	〃	〃				脚部に平行線文有り
12	須恵器	甕	SE03	ロクロナデ、体部平行叩き	〃	(23.2)			頸部外面にヘラ描き「＋」
13	〃	〃	SD07	ロクロナデ、体部平行叩き	頸部ヘラナデ、体部同心円文				

第20図　出土遺物(土師器、須恵器他)

図示できたものは１点のみである。

第21図４　第Ia層より出土したもので、つまみ部と天井部が残存している。擬宝珠形のつまみを有し、天井部には回転ヘラケズリ調整が施されている。

〈甕〉

杯に次いで出土量が多いが、すべて破片のため全体の器形がわかるものはない。体部外面には、大部分のものに平行叩き痕が認められる。内面のあて具痕には無文と同心円文のものがあるが、前者が多い。図示できたものは２点のみである。

第20図13　ＳＤ07溝跡より出土した大形の甕の頸部から体部にかけての破片である。体部外面には平行叩き痕、内面には同心円文のあて具痕が明瞭に認められる。

第20図12　ＳＤ07溝跡とＳＥ03井戸跡より出土した口縁部から体部にかけての破片である。体部から「く」の字状に屈曲した後、外傾して立ち上がり、口縁部でやや外反するものである。口縁端部は下方に丸くつまみ出されている。体部外面には平行叩き痕、内面には無文のあて具痕が認められる。また、頸部の一ヶ所に大きく「十」のヘラ描きが施されている。

〈壺〉

すべて頸部及び体部の破片で、図示できたものは１点のみである。

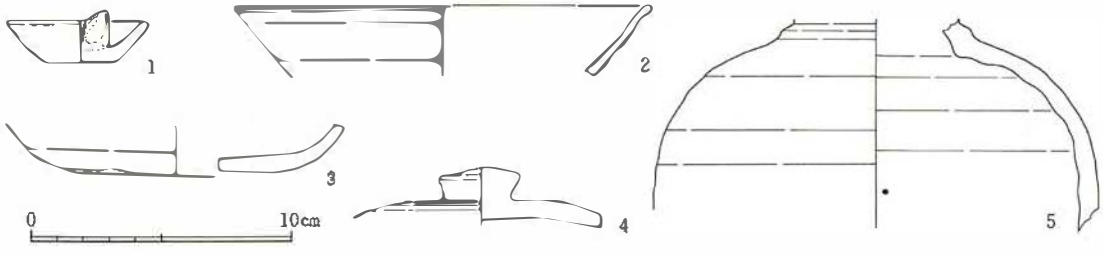
第21図５　第Ⅱ層より出土した頸部から体部にかけての破片である。残存部から、体部上半部が球形を呈した長頸壺と思われる。頸部と体部の境の外面には、かるい段状の高まりが巡っている。

(3) 赤焼土器

坏（第20図９）と高台付皿の器種がある。底部の切り離し技法はすべて回転糸切りで、再調整をもたないものである。高台付皿は削り出し高台をもつものである。

(4) 灰釉陶器

第Ⅱ層より１点出土している（第21図２）。椀の口縁部から体部にかけての破片である。口縁



No.	種別	器形	グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1		灯明皿	H-05	Ⅰb層	ロクロナデ	ロクロナデ	5.4	2.7	1.6	橙色の釉がかかる
2	灰釉陶器	椀	G-03	Ⅱ層	〃	〃	(16.0)			
3	須恵器	杯	E-04	Ⅰb層	ロクロナデ、底部手持ちヘラ削り	〃		(7.6)		
4	〃	蓋		Ⅰa層	〃　天井部回転ヘラ削り	〃				
5	〃	壺	D-03	Ⅱ層	〃	〃				

第21図　堆積土出土遺物

部付近をおさえて浅い段をつけ、口縁端部を外反させるものである。内外面とも釉を刷毛塗りした痕跡が認められる。

(5) 中世陶器

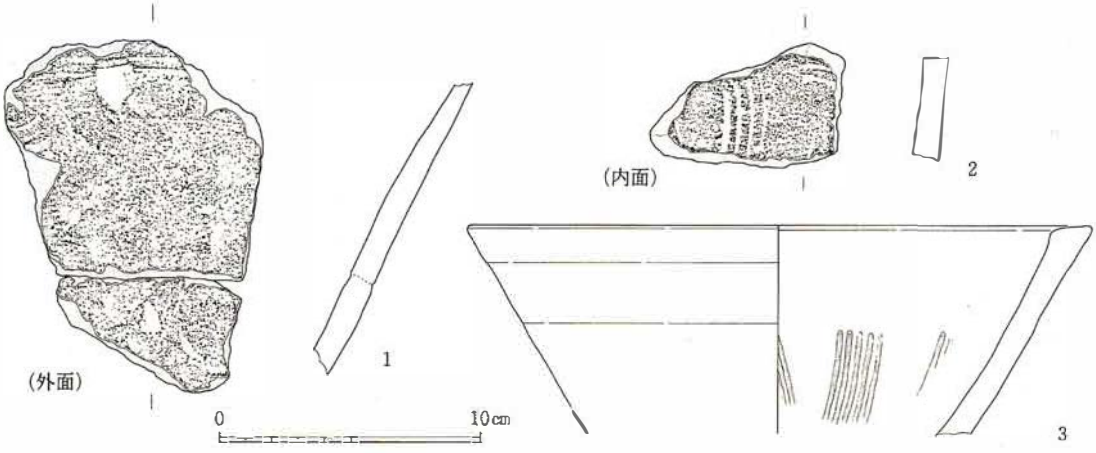
ＳＫ06土坑より出土した体部の破片が１点ある(第22図１)。残存部から擂鉢形を呈すると思われるもので、外面上部にはヨコナデが施されている。色調は外面が暗赤褐色、内面が褐灰色を呈する。

(6) 瓦質土器

溝跡より擂鉢の破片が２点出土している。いわゆる燻し焼きと呼ばれる焼成によるもので、焼きはやや軟質である。色調は表面は黒色、内部は灰色及びにぶい黄橙色を呈する。

第22図３　ＳＤ02溝跡より出土した口縁部から体部にかけての破片である。内面には５本で１単位の筋目が縦方向に施されている。筋目の幅は 1.7cmを計る。口縁端部は平坦であり、内外面両方向にやや肥厚する。

第22図２　ＳＤ05溝跡より出土した体部の破片である。内外面ともかなり磨滅が激しい。内面には５本で１単位の筋目が縦及び横方向に施されている。筋目の幅は 2.0cmを計る。



No	種別	器形	遺構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	中世陶器	擂鉢か	ＳＫ06	体部一部ヨコナデ					
2	瓦質土器	擂鉢	ＳＤ05	磨滅のため不明	磨滅のため不明				内面に5本一単位の筋目
3	〃	〃	ＳＤ02	〃	〃	(23.8)			〃

第22図　出土遺物(中世陶器、瓦質土器)

(7) 円面硯

ＳＤ03溝跡とＳＫ07土坑より出土している(第20図10・11)。いずれも脚部の破片で、同一個体のものと思われる。外面には４～６mmの細かな間隔で、縦方向への線刻が施されている。また、方形を呈すると思われる透しの一部が認められる。

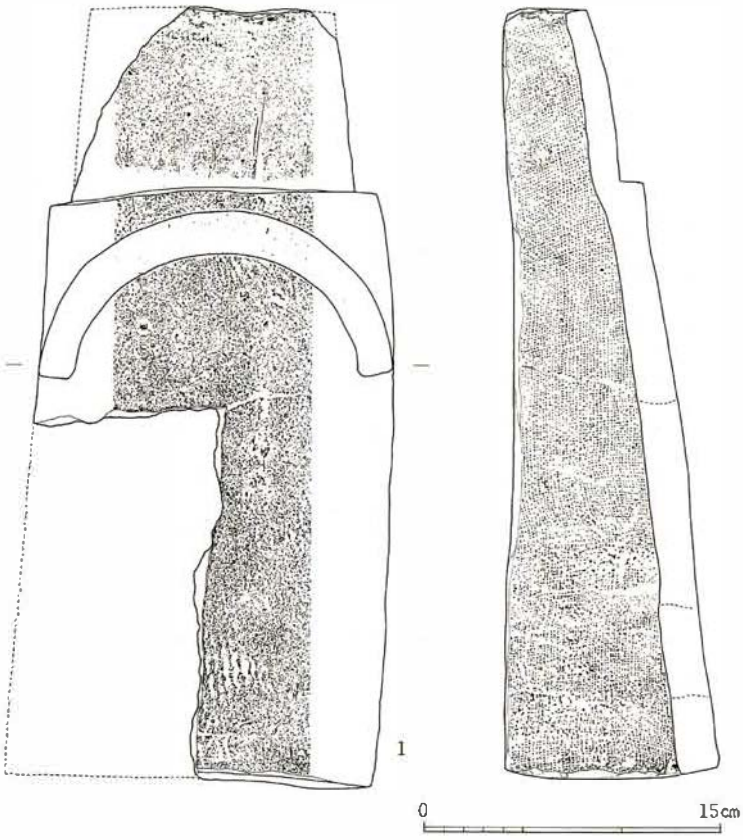
(8) 瓦

平瓦７点、丸瓦11点が出土している。このうち、遺構出土のものは約４割で、溝跡からの出

土が多い。

平瓦は、すべて破片のため製作技法や調整等は詳しく観察できない。凸面の叩きの原体は縄叩き目のみである。出土資料の中では、縄叩き目のつぶれがあるものはみられるが、ナデ調整を施している部分を観察できるものはない。凹面は布目痕が残るものと、ナデ調整を施して消しているものがある。

丸瓦（第23図１）は、玉縁付きの有段丸瓦である。凸面にはロクロナデによる調整痕がみられ、調整のおよばない部分では、それ以前の縄叩き目が観察できる。凹面には布目痕が残るものである。



No.	種別	遺構	備考
1	丸瓦	SD07・SE05	SD07とSE05出土のものが接合

第23図　出土遺物(丸瓦)

(9) 木製品

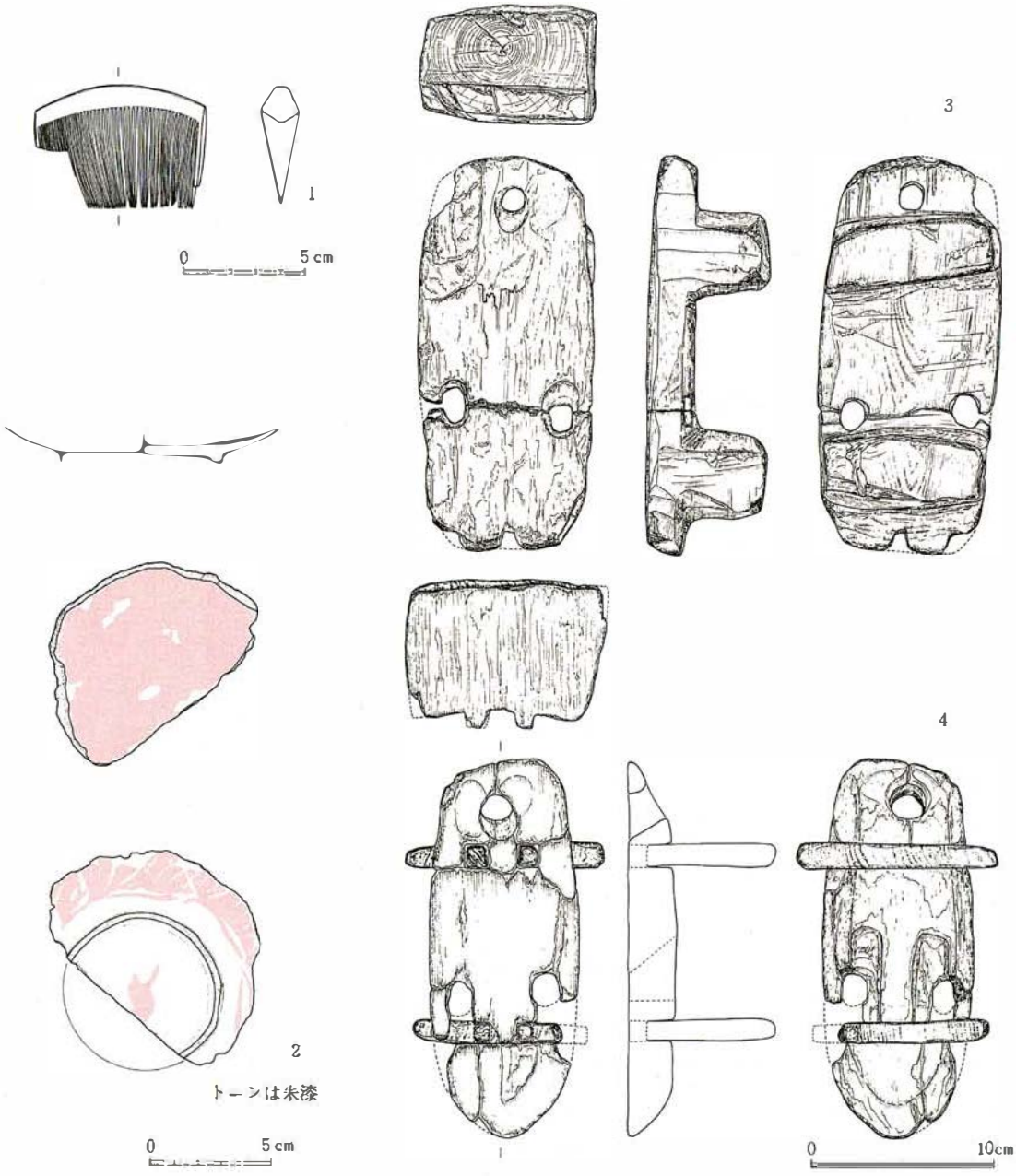
木製品は、溝跡、井戸跡、土坑から約40点出土した。この内、ＳＥ05井戸跡出土のものが過半数を占め、その豊富さが注目される。

〈下駄〉

２点出土している。第24図３は一木から作り出した連歯下駄と呼ばれるものである。台裏及び側面にはノミ状工具による整形痕が観察され、特に側面は加工の単位が明瞭である。また、前緒穴右前方の指圧痕、歯底部の磨滅は使用痕とみられる。歯の厚さは 4.2～ 4.7cm、高さは 3.8cmを計る。左足用と考えられる。第24図４は、台部と歯部を別々に作って組み合わせた差歯下駄で、差歯のホゾが台表面にあらわれる「露卯下駄」と呼ばれるものである。かなり腐食しているがほぼ完形に近く、形態はやや細身の楕円形を呈する。横緒穴の穿孔は斜めになされており、台裏では方形になっている。歯はやや下方に開き気味で、厚さ 2.6cm、幅11.0cm、高さ 7.0cmを計る。

〈櫛〉

1点出土している。第24図1は黒漆を塗布したと思われるほぼ完形の横櫛である。棟は山形の弧を描き、歯の間隔が非常に密であることから、水櫛、梳櫛にあたるものと思われる。棟の断面は台形を呈し、棟上幅 0.5cm、下幅 1.4cm、棟高 1.0cmを計る。歯の総数は44枚で、長さは 4.0cmである。



No.	遺構	種類	木取り	備考(長さ、幅、高さ、焦痕の有無、付着物の有無など)
1	SD01	横櫛	不明	高さ5.0cm、幅7.0cm、厚さ1.4cm
2	SE01	漆器、椀	不明	底径6.6cm、内面朱漆、外面黒漆
3	SK06	下駄(連歯)	芯持材	長さ21.4cm、幅9.7cm、高さ6.2cm、台の厚さ2.4cm、歯の厚さ4.2～4.7cm、歯の幅9.6cm
4	SD02	〃(差歯)	柾目	長さ20.7cm、幅8.5cm、高さ8.1cm、台の厚さ2.6cm、歯の厚さ1.3cm、歯の幅11.0cm

第24図　出土遺物(木製品)

〈曲物〉

曲物には、円形と方形の２種類が認められた。方形のものはいわゆる「折敷」の底板である。

蓋板

１点出土している(第29図５)。全体に腐食が激しく詳細な観察はできない。円板内周縁は約１cm幅で一段低く掻き取られている。その掻き取りの内側端部には、斜めの貫通孔が一ヶ所認められる。

側板

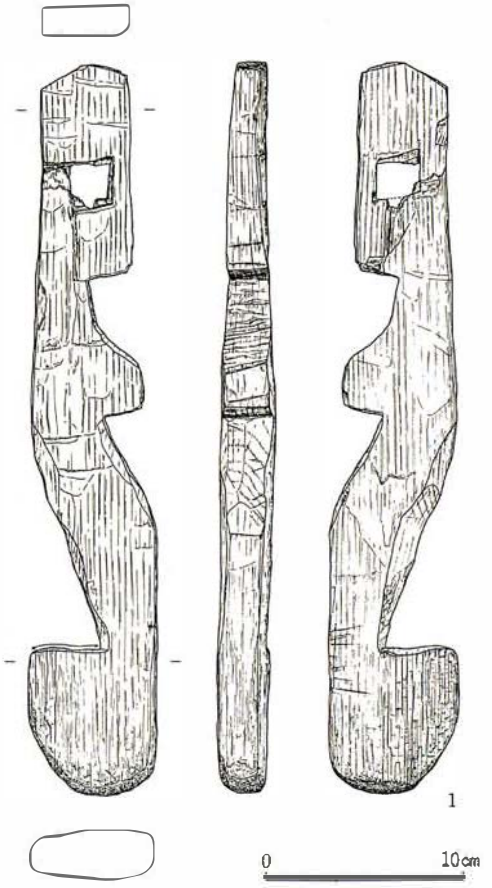
２点出土しているが、いずれも断片である。第29図６は綴じ合わせの部分で、樺皮によって１列６段まで綴じられている。綴じ目の内側には、罫引による切り込み線が幅 0.3～ 1.0cmの間隔で入れられている。また、一方には穿孔が２ヶ所あり、後述する箍と組み合わされていた可能性がある。

箍

箍と思われるものが2点出土している。第28図１は釘孔穴が４ヶ所あるが、いずれも間隔は不揃いで、斜め上方より穿たれている。内面には黒漆と思われるものが塗布されていることから側板の一部の可能性もある。重ねの部分には切り込み線が短く入れられる。第28図２は釘孔穴が４ヶ所あり、その内一ヶ所には木釘が遺存していた。いずれも斜め上方から穿たれている。板の重ねは、一部重ね板が残っていることから二重であることがわかる。綴じ目は、約４mm幅の樺皮を用いておりその周辺には焦痕がみられる。

底板

３点出土している。第26図１は円形曲物の底板で、木釘を向い合う４ヶ所に打って側板を固定したものである。また、側周を斜めに削り、円形に整形した痕跡が残っている。第26図２と第27図１は方形曲物（折敷）の底板で、いずれも隅切型である。前者は側板を樺皮で４ヶ所綴じたものであ



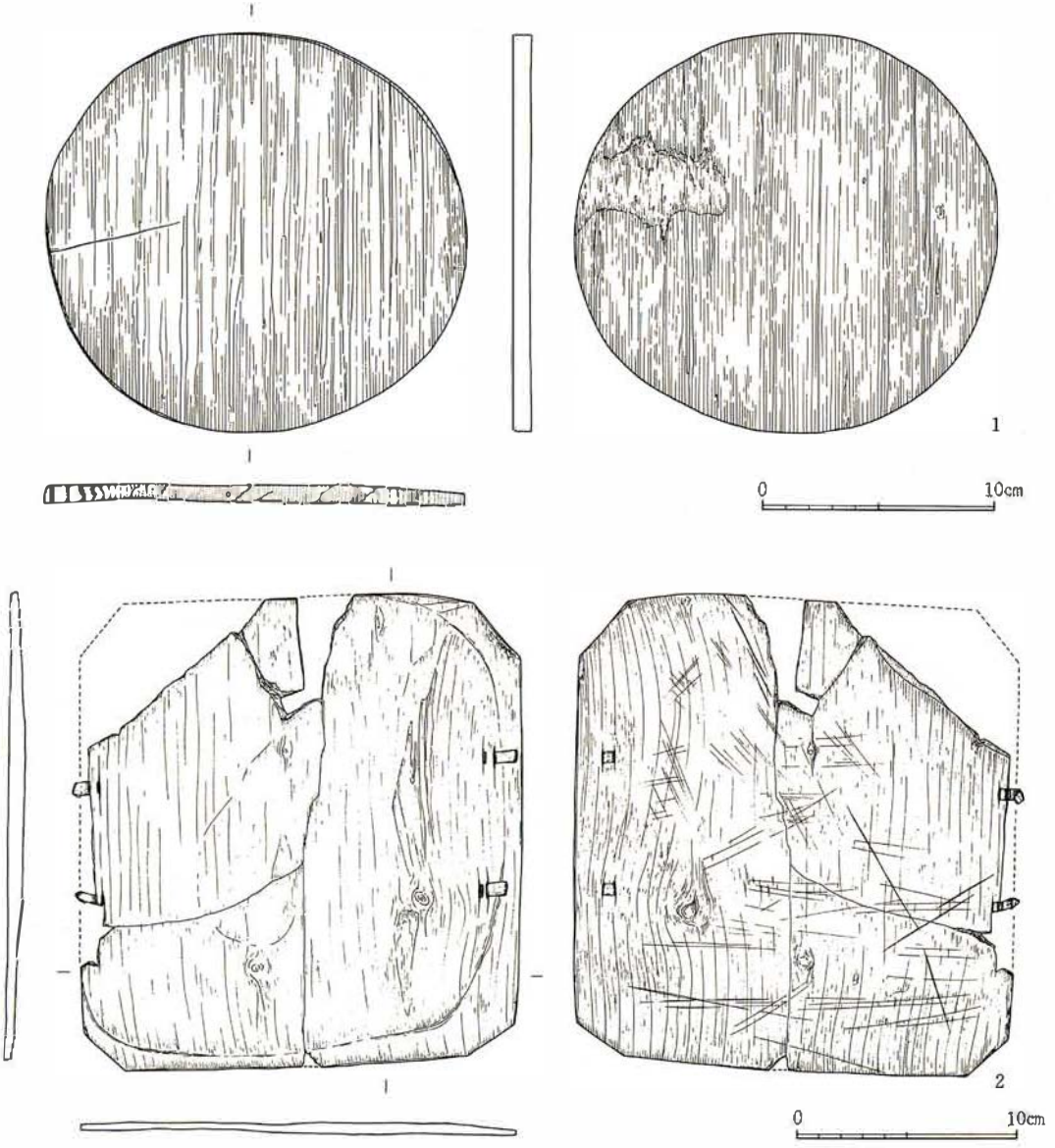
No	遺構	種類	木取り	備考(長さ、幅、高さ、無痕の有無、付着物の有無など)
1	SK07	自在鉤	柾目	長さ37.0cm、幅6.5cm、厚さ2.6cm、全体に焼けて一部は炭化

第25図　出土遺物(木製品)

る。内面には側板を固定していた際の痕跡が隅丸方形状に残り、外面には不定方向の多数のキズが認められる。後者はかなり大形のもので一辺30cmを越える。樺皮による綴じ穴は7ヶ所あり、その内一ヶ所には側板の断片が残存している。内外 面にはキズがみられ、特に外面に多い。

〈挽き物〉

盤が1点出土している(第27図2)。口縁はやや内弯し、わずかに体部内面が立ち上がるものである。底部はロクロ挽きによって高台を削り出している。内外面には不定方向のキズと焦痕がみられる。

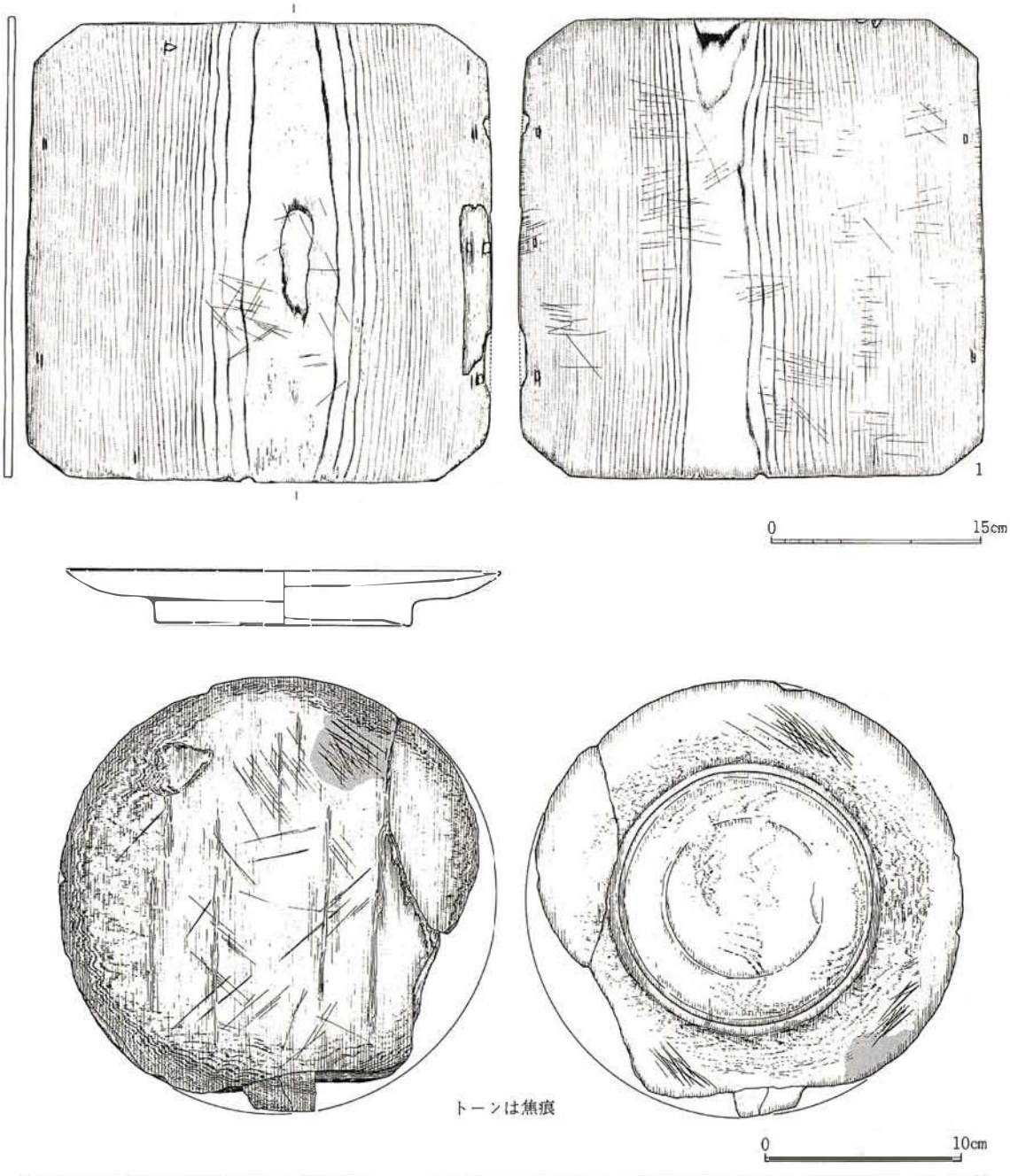


No	遺構	種類	木取り	備考(長さ、幅、高さ、細瑞の有無、付着物の有無など)
1	SE04	曲物底板	柾目	直径 17.2cm、厚さ 0.8cm
2	SD03	折敷板	板目	大きさ 21.3×19.7cm 厚さ 0.8cm

第26図 出土遺物(木製品)

〈漆器〉

椀が2点出土している。第24図2は口縁部を欠損したもので、内面に朱漆、外面に黒漆を塗っている。外面にはさらに朱漆によって文様が描かれているが、図柄は不明である。他の1点は図示できないが、SD05溝跡より内面朱漆、外面黒漆のものが出土している。



No.	遺構	種類	木取り	備考(長さ、幅、高さ、焦痕の有無、付着物の有無など)
1	SK06	折敷	板目	大きさ 32.2×32.9cm 厚さ0.5cm
2	SE05	盤	柾目	口径22.4cm、底径13.1cm、器高2.8cm、内面に焦痕あり、ロクロ挽き

第27図　出土遺物(木製品)

〈箸状木製品〉

２点出土しているが、両者とも細長い枝状の材を用いていることや、面取りの仕方から、同一個体の可能性がある(第29図１・２)。両者の断面形についてみると、２の下半部は偏平であり、一方、１は丸味をおびている。この違いは２が先端に近い部分であることを示している。

〈串状木製品〉

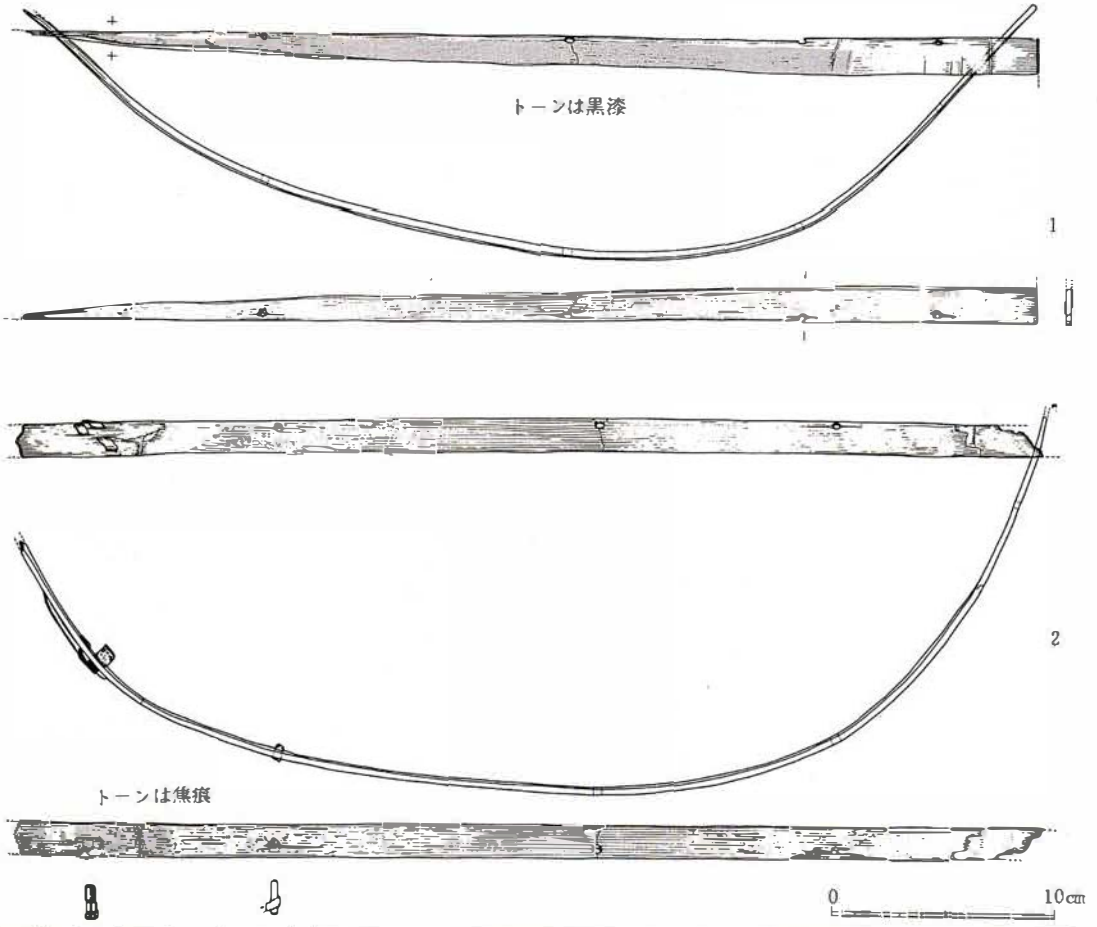
１点出土している(第29図３)。柾目板を縦に分割したものを素材とし、先端を鋭利に加工している。加工面は４面で構成され、断面形は方形を呈する。

〈斎串〉

ほぼ完形のものが１点出土している(第29図４)。上端部は圭頭形を呈し、両側辺の対称する位置には８ヶ所にV字形の切り欠きを施している。先端は両側辺から削って尖らせている。

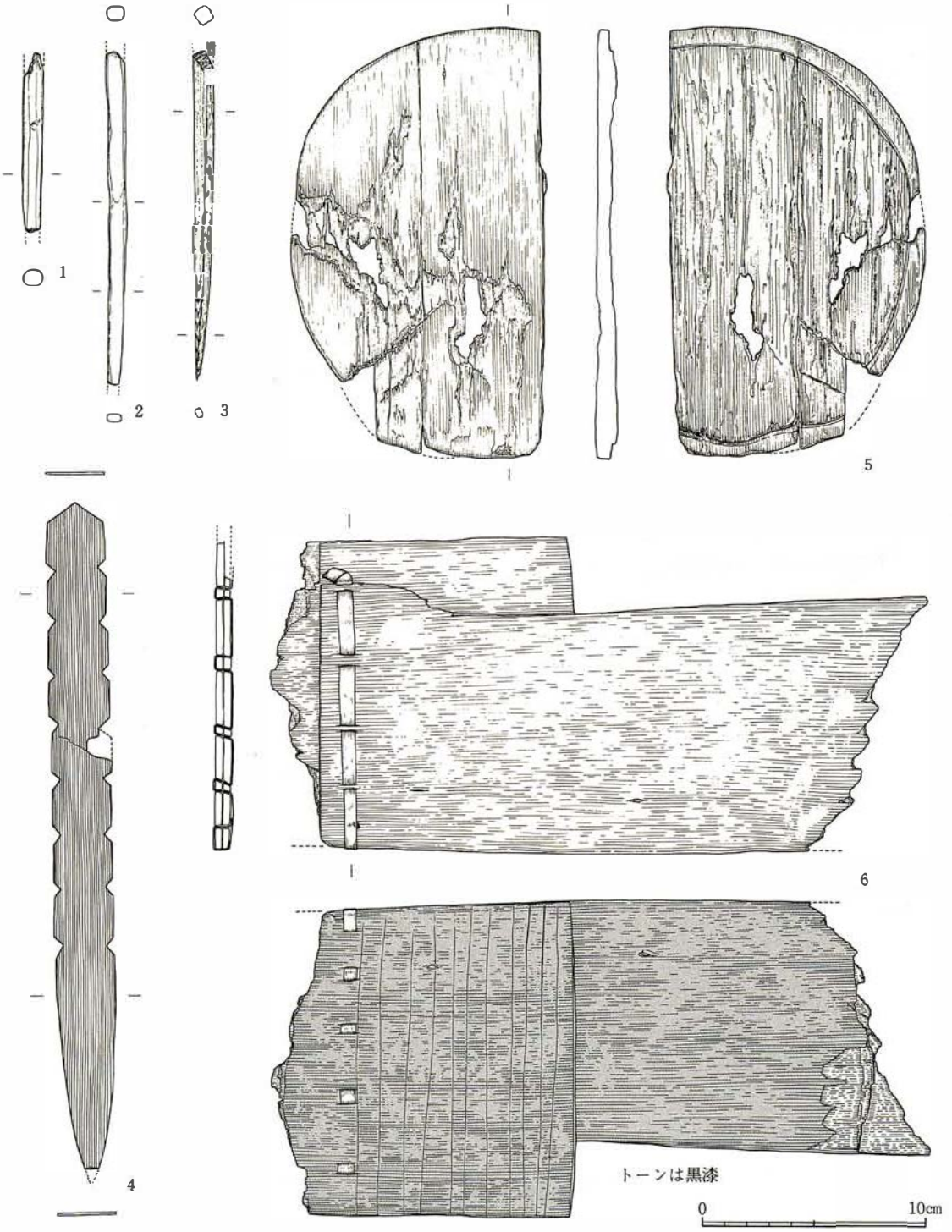
〈自在鉤〉

完形品が１点出土している(第25図１)。全体を手斧状の工具で加工しており、その痕跡とし



No.	遺構	種類	木取り	備考(長さ、幅、高さ、焦痕の有無、付着物の有無など)
1	SE05	箸状木製品	柾目	長さ 52.5cm 厚さ0.3cm 内面黒漆、刻み目
2	〃	〃	〃	長さ 58.4cm 幅 1.5cm 厚さ 0.3cm

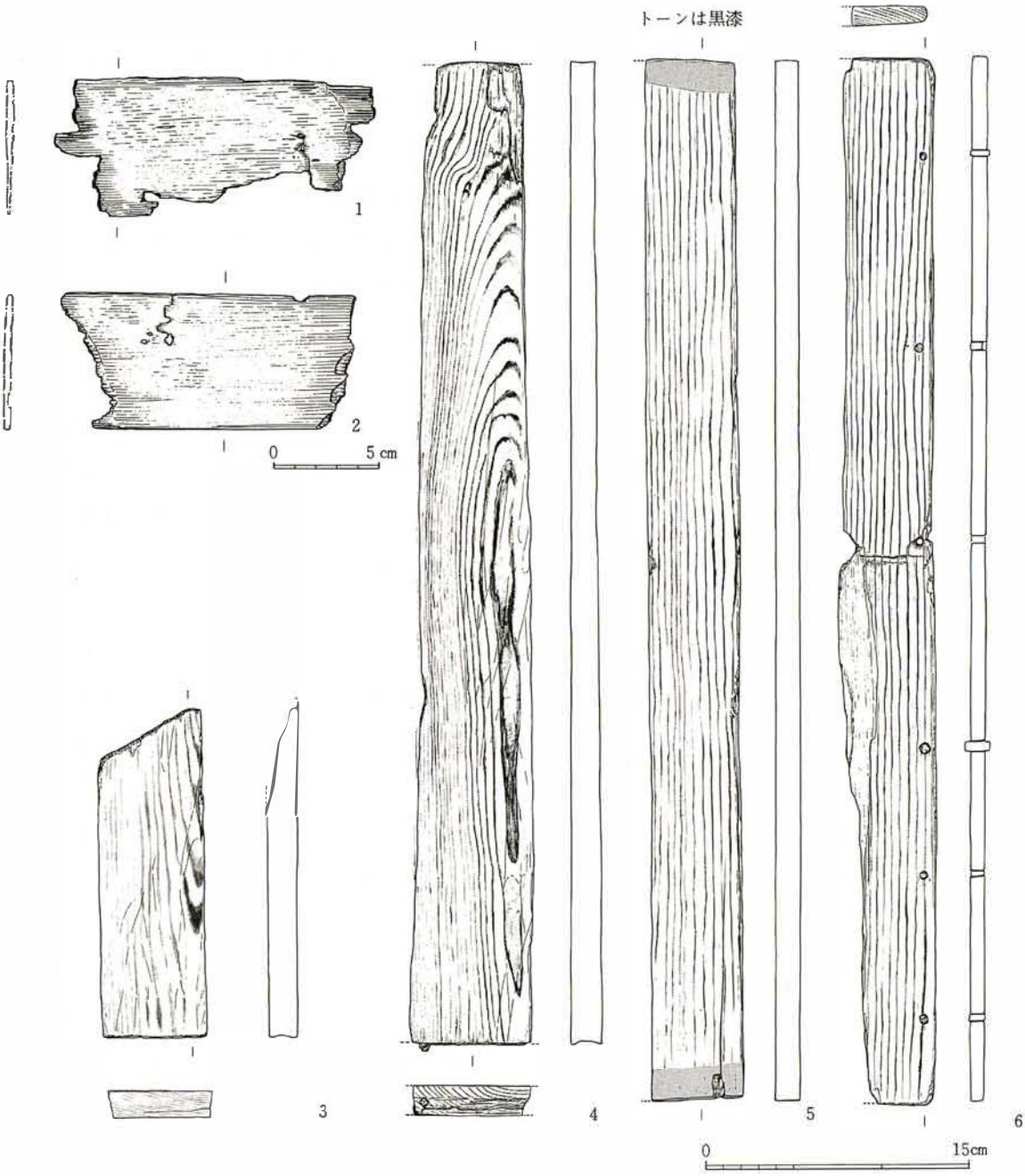
第28図　SE05出土遺物(木製品)



No.	遺構	種類	木取り	備考(長さ、幅、高さ、蝕痕の有無、付着物の有無など)
1	SE05	箸状製品	—	長さ 7.9cm 幅 0.9cm
2	〃	〃	〃	長さ14.9cm 幅 0.8cm
3	〃	串状製品	柾目	長さ15.7cm 幅 1.0cm
4	〃	斎串	〃	長さ29.7cm 幅 2.7cm 厚さ 0.1cm
5	〃	曲物蓋板	〃	直径19.2cm 厚さ 1.0cm 裏面腐蝕が著しい
6	〃	曲物側板	〃	厚さ 0.3cm 内面黒漆 刻み目

第29図 SE05出土遺物(木製品)

て、鉄斧の刃先がめり込んだ跡も数ヶ所で観察できた。全体的に火を受けた痕跡が認められ、特に鉤の部分で炭化が著しい。また矢印の範囲は磨滅しており、使用痕と考えられる。



No	遺構	種類	木取り	備考(長さ、幅、高さ、無痕の有無、付着物の有無など)
1	SE05	曲物側板	柾目	全体に腐食
2	〃	〃	〃	〃
3	〃	板状木製品	板目	長さ18.8cm 厚さ1.7cm 一端に刃物の切断痕跡あり
4	〃	〃	〃	〃 55.9cm 〃 1.8cm 両端を切断
5	〃	〃	〃	〃 59.1cm 〃 1.4cm 両端に黒漆
6	〃	〃	〃	〃 59.4cm 〃 0.9cm 6ヶ所の内5ヶ所木釘残存

第30図　SE05出土遺物(木製品)

〈板状木製品〉

製品の一部と思われるが、用途、機能が明確にできないものである（第30図３～６）。４点出土しており、いずれも木理の方向に割り裂いて板状にしている。３と４は形態及び端部の切断方法が同様であることから、同一部材の可能性が強い。両者ともカンナ状の工具で削った跡がみられる。また、４の右端切断面には四角柱の小さな突起が残してあり、他の部材と組み合うところと思われる。５の片面の両端には、各一ヶ所に釘穴痕と切り込み線がある。これは方形状の製品の組み合わせ部分にあたると思われ、この面は裏面と考えられる。一方、その表面の両端には樹皮を貼り付け、その部分には黒漆が塗布されている。６は有孔の板状製品で、６ヶ所に木釘穴があり、その間隔は不揃いである。木釘は５本残存しており、いずれも角柱状の形態である。

〈井戸枠材〉

井戸枠材①～④（第31図１～３、第32図２）は、すべてＳＥ05井戸跡のものである。幅５～６cmの丸木を利用し、両先端を凸型及び凹型に加工したものを組み合わせている。一辺の長さは、凸型（北、南辺）で 126cm、凹型（東、西辺）で 134cmを計る。すべての枠材は樹皮を剝がした後、ほぼ全面を削っており、部分的に単位がわかるものもある。

〈杭〉

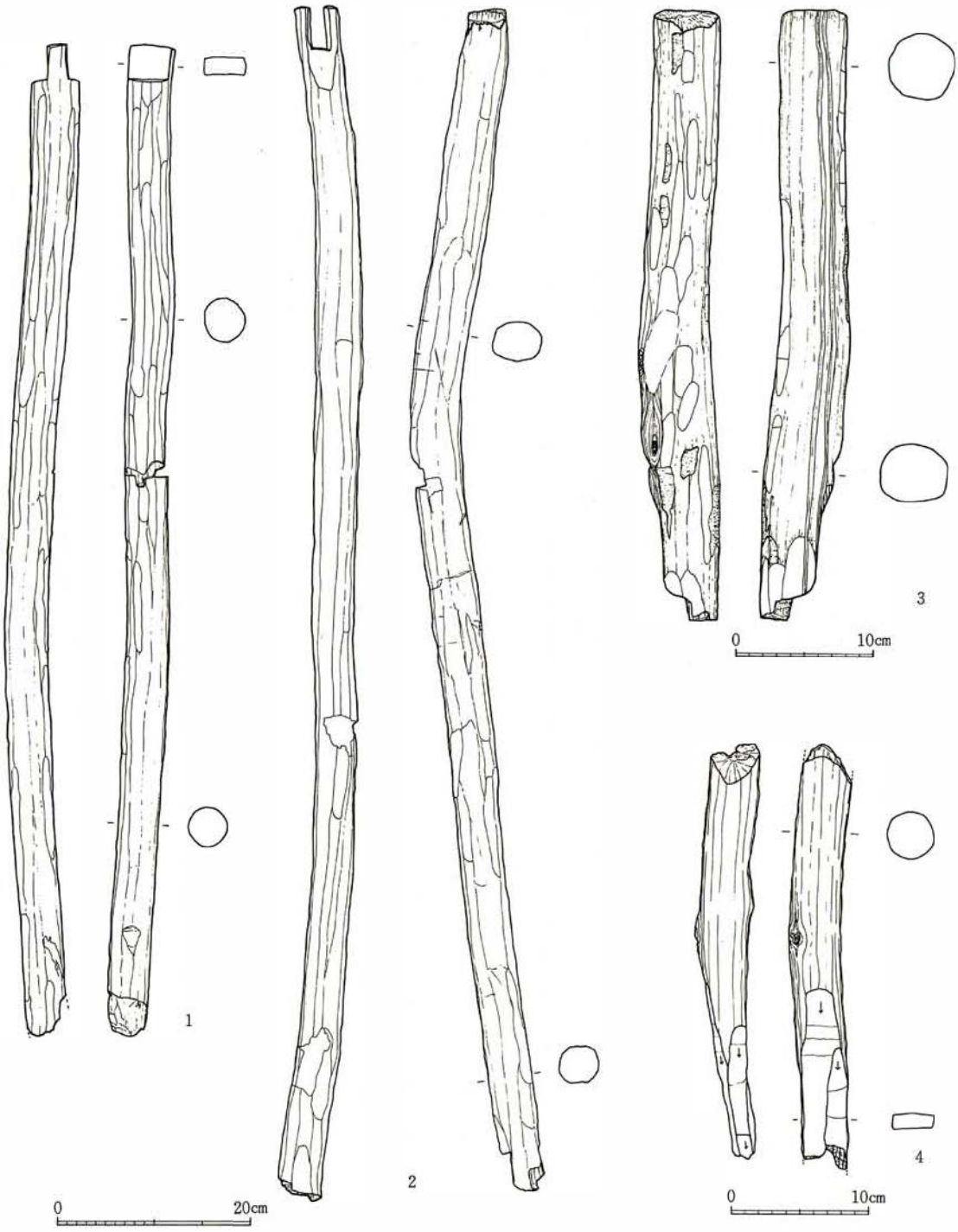
はじめにＳＥ05井戸跡出土の５本の杭について個々に記述する。

杭㋑～㋭は、概ね、長さ30～40cm、幅４～５cmの丸木材を素材としている。㋑（第33図１）は弯曲した胴部を持ち、樹皮を残していない。杭の頭部は腐食しており、加工痕及び加撃痕は観察できない。胴部と末端部際には枝を削った加工面があり、その部分に焦痕が残っている。これは枝の基部を焦がした後に削ったものと考えられるが、末端部際の節部については、あるいは手折りの手法も考えられる。末端部の加工面は６面で構成され、先端は非常に鈍く作られている。㋺（第33図2a・2b）は同一個体と思われ、樹皮が残っているものである。ａは末端部と思われ、加工面は５面から構成される。加工の順序は上から下へ行われている。㋩（第33図３）はやや弯曲した胴体部を持ち、樹皮が残っているものである。杭の頭部は一刀打で切断されており、唯一、原形を保っている。末端部は２面の加工面で構成されるが、切り合いは有していない。㋥（第33図4a・4b）は同一個体と思われ、両者とも全体を焼き焦がしている。ａは樹皮が残存している胴体部で、枝の削りを途中で止め、ひき裂いている加工面がある。ｂは樹皮をすべて剝がした胴体部片で、枝を削った加工面があり、さらに、その下方の加工面は末端部に近い部分であると考えられる。㋭（第32図４）は上部を破損した杭で、樹皮は残っていない。末端部は先端が板状を呈し、数面の加工痕がみられるが、腐食のため明瞭ではない。

次にＳＤ03溝跡（ⓐ～ⓕ）とＳＫ07土坑（ⓖ）出土の７本の杭について記述する。

No	遺構	備考	No(第14図中)	No	遺構	備考	No(第14図中)
1	SE05	長さ125.4cm、幅4.9cm 凸部	①	3	SE05	長さ133.6cm、幅5.6cm 凹部	②
2	〃	〃 125.8cm、〃 4.4cm 凸部	③	4	〃	〃 126.8cm、〃 5.5cm 凸部	⑤

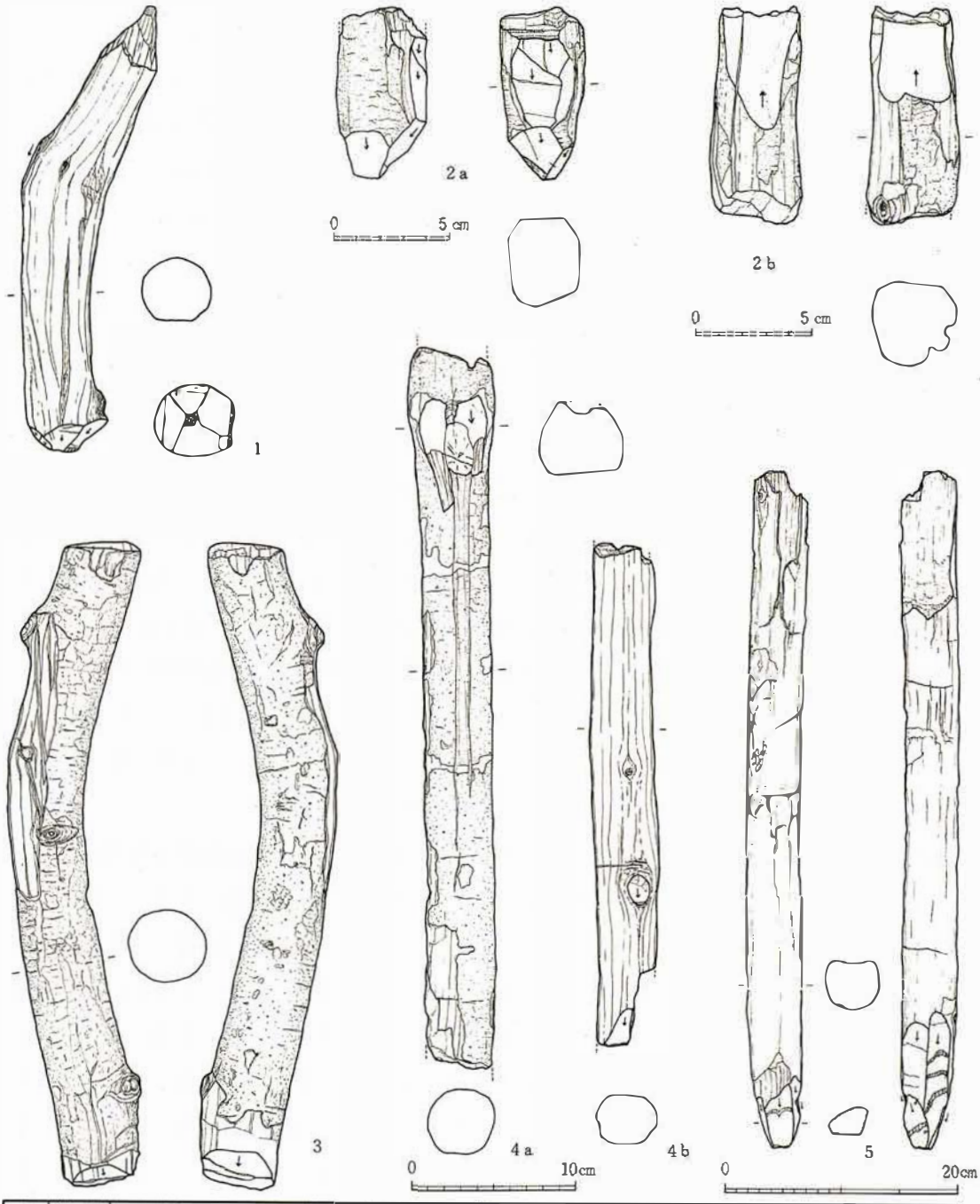
第31図　SE05出土遺物(井戸枠材)



No.	遺構	備考	No.(第14図中)
1	SE05	長さ101.7cm、幅4.3cm 凸部	⑥
2	〃	〃 122.6cm、〃4.9cm 凹部	④

No.	遺構	備考	No.(第14図中)
3	SE05	長さ44.5cm、幅4.8cm	⑦
4	〃	長さ30.1cm、幅4.0cm	㊥

第32図　SE05出土遺物(井戸枠材、杭)



No.	遺構	備考	No.(第14図中)	No.	遺構	備考	No.(第14図中)
1	SE05	長さ40.0cm、幅 5cm	㋐	4a	SE05	長さ44.1cm、幅5.3cm	●
2a	〃	長さ 7.3cm、幅3.1cm	㋑	4b	〃	長さ30.6cm、幅3.8cm	〃
2b	〃	長さ 9.4cm、幅3.8cm	〃				
3	〃	長さ39.1cm、幅4.8cm	㋒	5	SK07	長さ58.2cm	㋓

第33図　SE05出土遺物(杭)

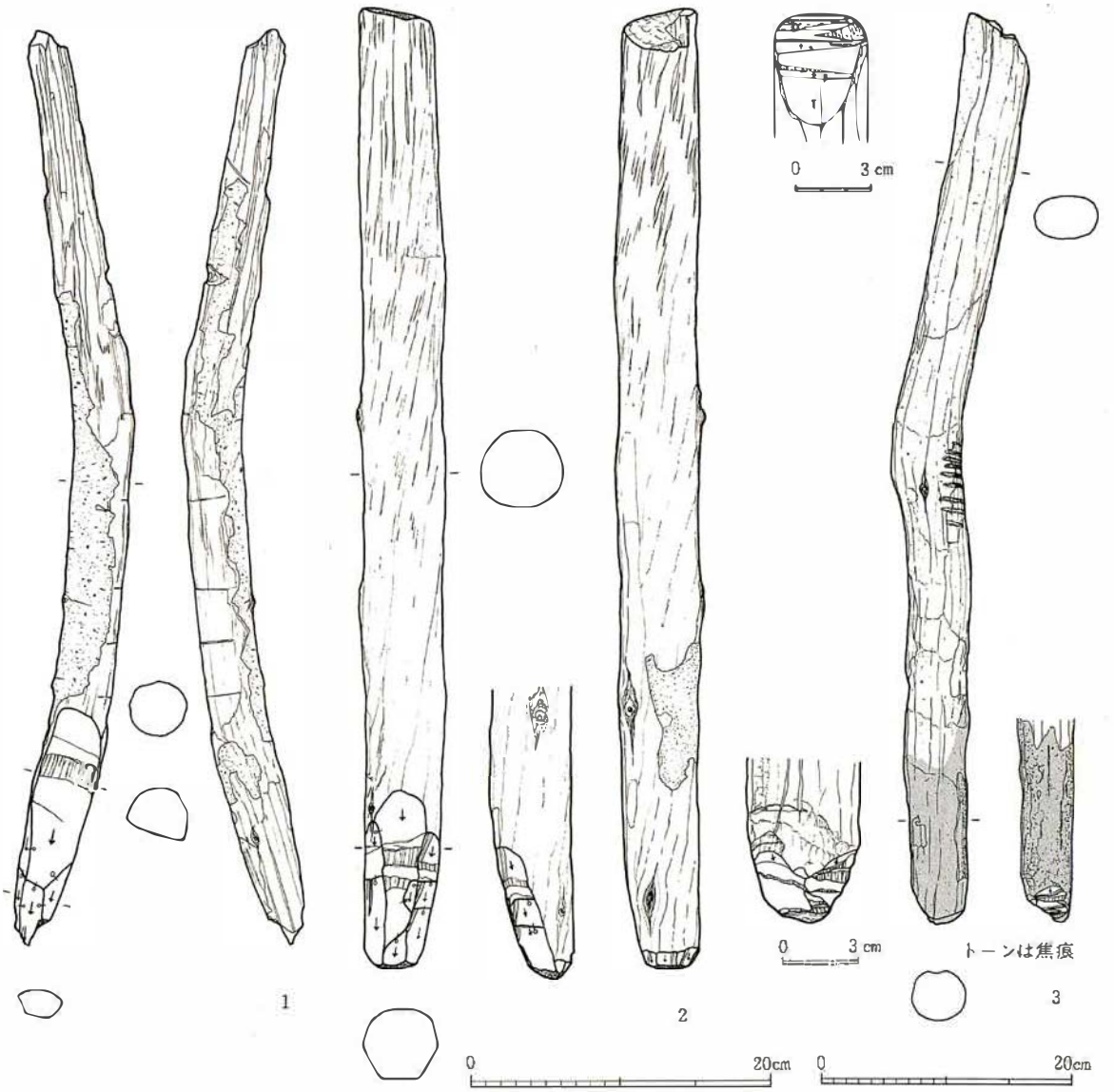
ⓐ（第34図1）は弯曲した胴体部をもち、頭部付近は腐食のため先細りになっている。末端部は片面のみの加工で、加工面は5面で構成される。加工の方向は上から下へ行われ、はじめ

に最大刃部幅 3.7cmの大きめの加工面が作られる（第１段階)。次に、先端部を尖らせるための先端調整加工（４面）が施される（第２段階)。なお、第１段階の加工面には、鉄斧の刃先がめり込んだ痕跡が観察される。ⓑ（第34図２）は取り上げ時にほとんどの樹皮が剝離してしまい、現状では一部にしか残っていない。頭部は加撃によって打ち折られたような状況を呈する。末端部の加工面は８面で構成され、３段階の工程からなる。第１段階は幅 1.3cm程の小さめの面を作る（３面あるいはそれ以上)。次からの工程はⓐと同様の順序をたどる。加工面の大半には、鉄斧の刃先がめり込んだ痕跡と、２～３mm幅の刃こぼれ痕が１条みられた。ⓒ（第34図３）は中央付近で屈曲する胴体部をもち、樹皮が残存する。頭部には加工が施されるが、頂部付近はつぶれが生じている。加撃によるものであろうか。加工方法は鉄斧の刃先のめり込んだ面が縦に連続するもので、同様の方法は末端部でもとられている。末端部は片面からの加工で、その付近は焼き焦がされている。ⓓ（第35図１）は上半でやや屈曲するもので、樹皮がほぼ全体に残っている。胴体部の上端付近には、枝を削った加工面がある。末端部は片面からの加工である。第１段階の加工は左右に分けて行われ、４面から構成される。第２段階は先端調整加工で３面から構成される。また、鉄斧の刃先がめり込んだ痕跡が１面ある。ⓔ（第35図２）は胴体部全体がゆるやかに弯曲するもので、樹皮は残存している。頭部付近は先細りで、末端へ向かって徐々に太くなっていく。胴体部には枝を削った跡が４面あり、これは末端部の加工方向とは逆に頭部に向かって行われる。その他にも枝を折った箇所が３ヶ所ある。全体を焼き焦がした後に末端部の加工がなされており、ⓐ～ⓓとは異なり、全面におよんでいる。しかし、加工の方法はⓑに共通しており３段階の工程からなる。第１段階は刃部幅１cm程の小さな面を作る（７面あるいはそれ以上)。第２段階は縦長の面を３面作り、大まかな形態を整える。第３段階は第１段階の加工面を切って先端調整加工が行われる。末端部の加工面は14面で構成される。ⓕ（第35図３）はやや屈曲する胴体部をもつもので、上半には樹皮が残り、下半には焦痕がみられる。枝を削った痕跡が２ヶ所あり、その両方ともにひき裂き痕が残る。末端部は５面の加工面からなり、２段階の工程をもつ。第１段階は幅 2.8cmの大きめの加工面を２面作る。第２段階は幅１cm前後の３面からなる先端調整加工である。ⓖ（第33図５）はかなり腐食しており、樹皮は残存していない。末端部の加工は全面におよび、２段階の工程からなる。第１段階は幅２cm程の細長い加工面３面以上で構成される。第２段階は先端調整加工で、大きく３面からなる。加工面は、腐食のため明瞭でないが６面以上であろう。

以上、７本の杭はⓖを除いて、すべてＳＤ03溝跡内において共伴関係が確かめられ、同時に打ち込まれたものとみなすことができる。溝部から検出したものにはⓐ～ⓒがあり、土坑状の落ち込み部からはⓓ～ⓕがある。長さは前者が60～70cm、後者が80～120cmを計る。この長さの違いは、溝部底面と土坑状落ち込み部底面との高低差が40cm程あることに呼応しているよう

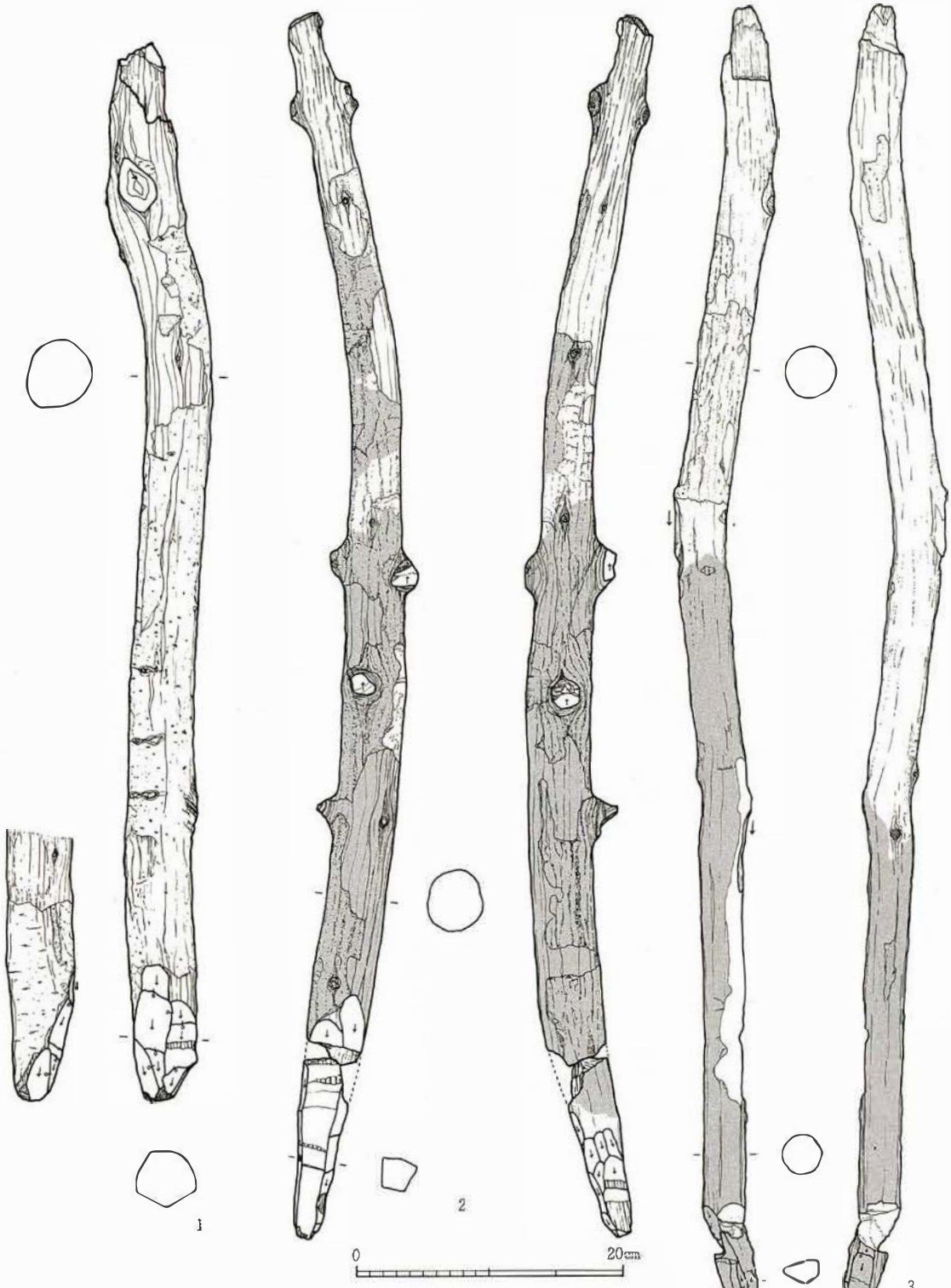
で、製作時に調節したものとみられる。打ち込みの深さについては、ⓑでみると約35cmあり、残存長の約½を打ち込んでいる（第９図参照）。他のものについても、ほぼ同様であった。

次に、杭の加工方法についてまとめてみると、第１にＳＤ03溝跡出土の杭は、自然面を一端に残す片面のみの加工を基本としている。第２に加工方向としては、概ね末端方向にとられているが、ⓒの頭部及びⓔの胴体部に例外が認められた。第３に加工の手順は、１段階の工程をとるもの(ⓒ)、２段階の工程をとるもの（ⓐ、ⓓ、ⓕ）、３段階の工程をとるもの(ⓑ、ⓓ、ⓔ)に分類することができたが、それらの基本となっているのは２段階の工程である。



No	遺構	備考	No(第９図中)	No	遺構	備考	No(第９図中)
1	ＳＤ03	長さ60.7cm、幅3.9cm	ⓔ	3	ＳＤ03	長さ72.1cm、幅5.1cm	ⓒ
2	〃	長さ63.7cm、幅5.5cm　刃こぼれ痕１条あり	ⓑ				

第34図　SD03出土遺物(杭)



No	遺構	備考	No.(第9図中)
1	SD03	長さ78.8cm、幅5.0cm	ⓓ
2	〃	長さ91.1cm、幅4.2cm	ⓒ
3	〃	長さ116.3cm、幅4.5cm	ⓕ

トーンは焦痕

第35図　SD03出土遺物(杭)

(10) 石製品

石製品には、硯、砥石、紡錘車、使用痕のある礫、刻線のあるスレート片がある。

〈硯〉

2点出土しているが、図示できたものは1点である(第36図1)。側面及び裏面は平滑に磨き込まれている。縁の際には筋状の溝痕が数条あり、また、硯面はかなり使いこまれたのであろうか大きく窪んでいる。

〈砥石〉

7点出土しているが、図示できたものは4点である。第36図2は扁平な素材を用いており、細かな単位で擦痕が不定方向にみられる。第36図3はノミ状の工具で削った整形時の痕跡が残っている。砥面は中央が窪んでいるが、擦痕はさほど明瞭ではない。第36図4は端部の破片と思われ、砥面は3面で構成されている。以上の3点は砥面の滑らかさから仕上砥に使われたものであろう。第37図1は梵字が陰刻されており、板碑の一部とみられる。碑面及び側面は、滑らかに擦りあがっており、砥石に転用された可能性が強い。

〈紡錘車〉

1点出土している(第36図5)。半欠品で直径約5㎝、厚さ 1.2㎝を計る。全体を良く研磨しており、下面には中央の円孔に向かって線刻がみられる。文様を意図したものかもしれない。

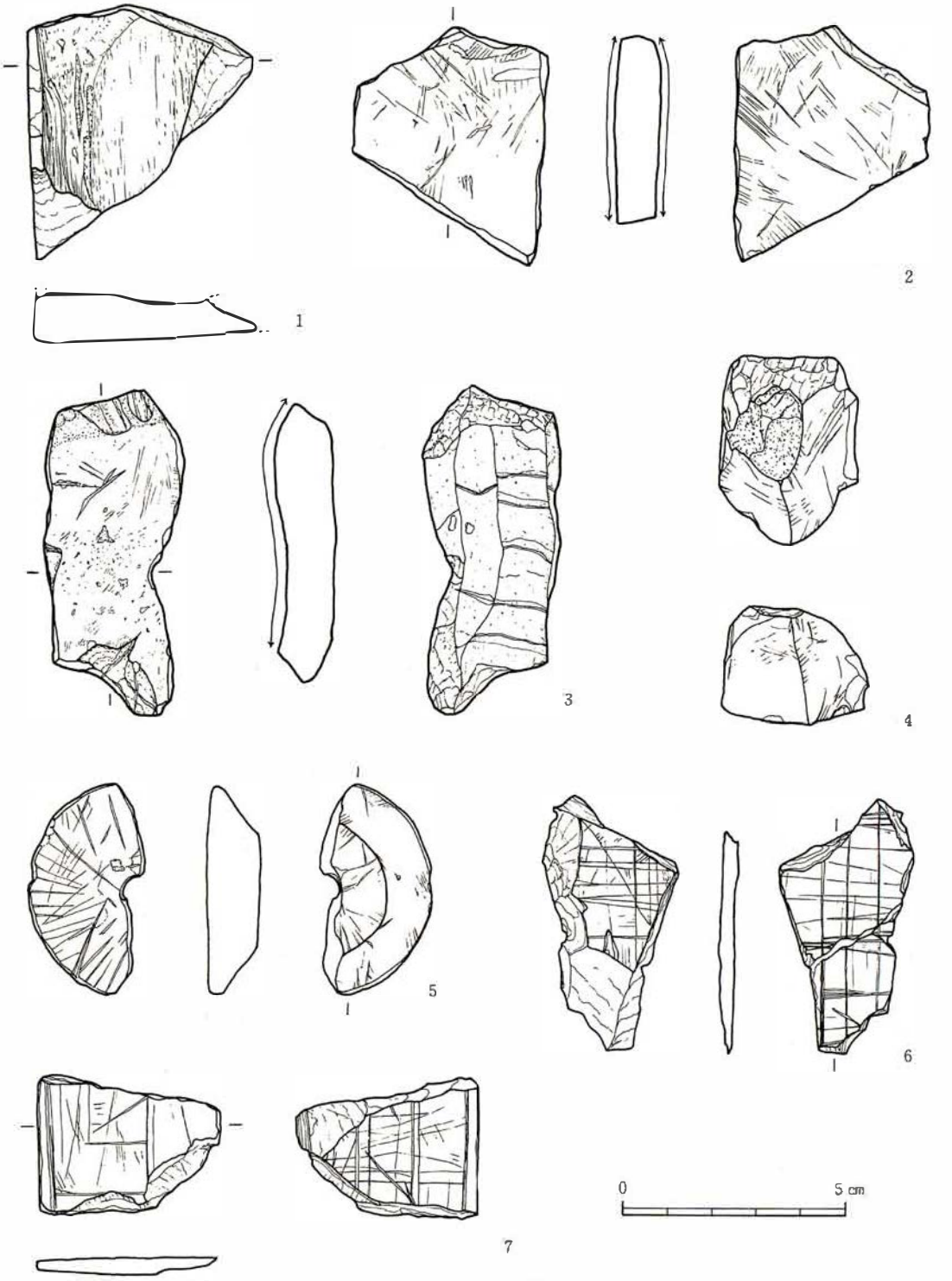
〈使用痕のある礫〉

4点出土している。第37図3・5は多孔質の石質である。3は平坦な面をなし、さほど磨痕は明瞭でない。5は凸状の面をなし磨滅が著しい。側面には擦痕もみられる。第37図2は台状の形態であり、表面には凹凸があるが、全体に磨滅している。また、一部には線状痕がみられる。裏面にも凹凸があるが、凸部のみに磨痕が限定される。表面及び側面上端付近は黒褐色に変色している。第37図4は楕円形の扁平な礫を素材とし、表面及び裏面の一部には黒褐色の付着物がある。表面の中央付近は、灰色に変色し磨滅している。さらに、裏面の高位部にも磨滅が認められる。

今回出土した礫は、すべて井戸跡からの出土である。出土状況については、特に投棄した状況も観察できなかったが、今後検出状況には注意を払う必要はあろう。なお2に関しては、かなり大形の礫を素材としていることから、固定して使用したものと考えられる。また、その面の状態から擦る、叩く等の作業が行われたことが推察される。これに類するものとしては、仙台市今泉城跡(註5)、多賀城市新田遺跡で比較的多く出土しているが、用途や機能に関しては不明な点が多く、今後の課題であろう。

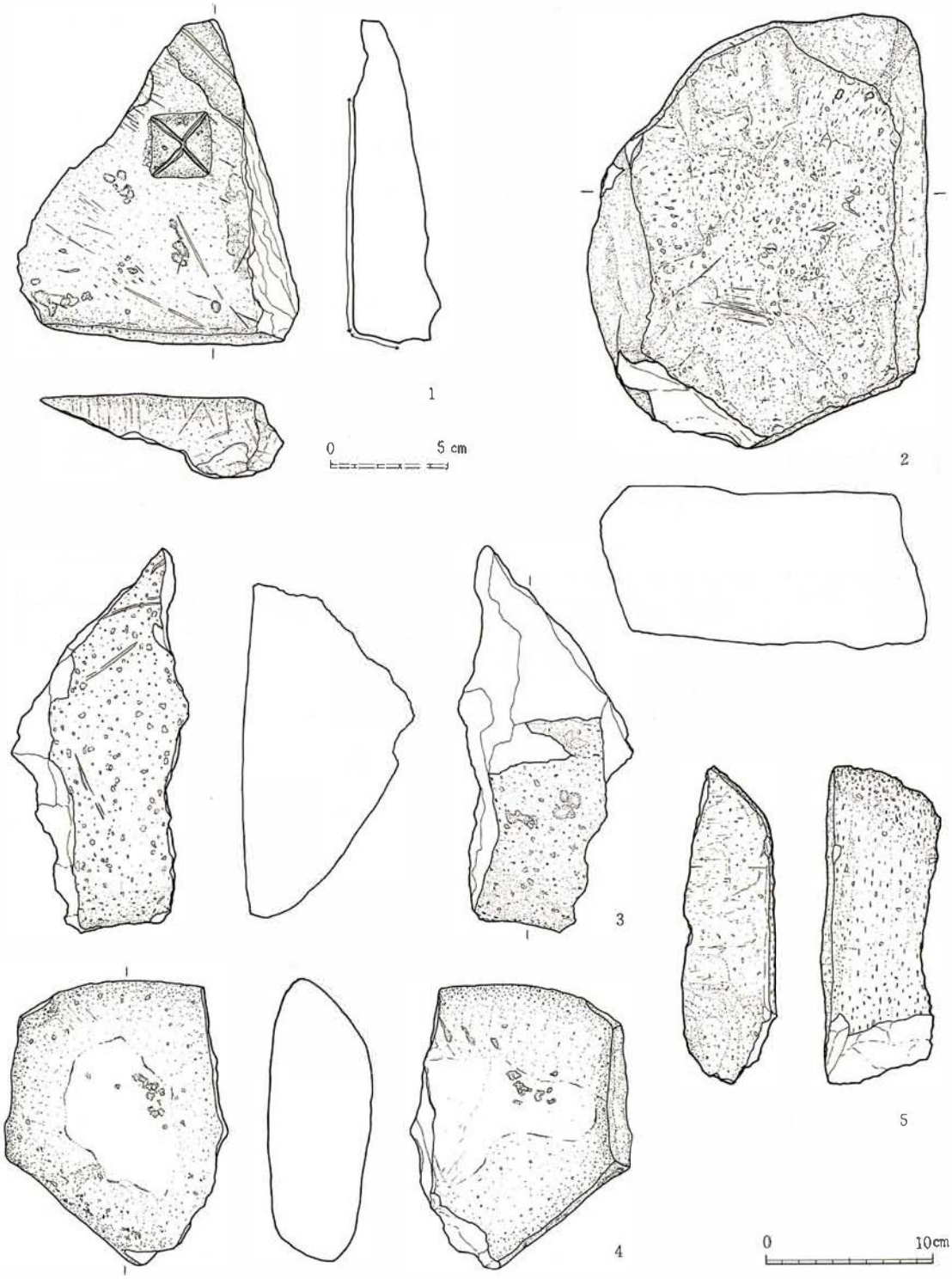
〈刻線のあるスレート片〉

2点出土している(第36図6・7)。表裏面は両者とも平滑に磨かれている。刻線は格子目状



No.	グリット	層位	石質	No.	グリット	層位	石質
1	G-03	Ⅰ層	泥岩	5	B-01	Ⅱ層	—
2	G-06	Ⅱ層	シルト岩	6	B-04	Ⅰ層	粘板岩
3	F-06	〃	〃	7	E-03	Ⅱ層	〃
4	G-04	〃	〃				

第36図　出土遺物(石製品)



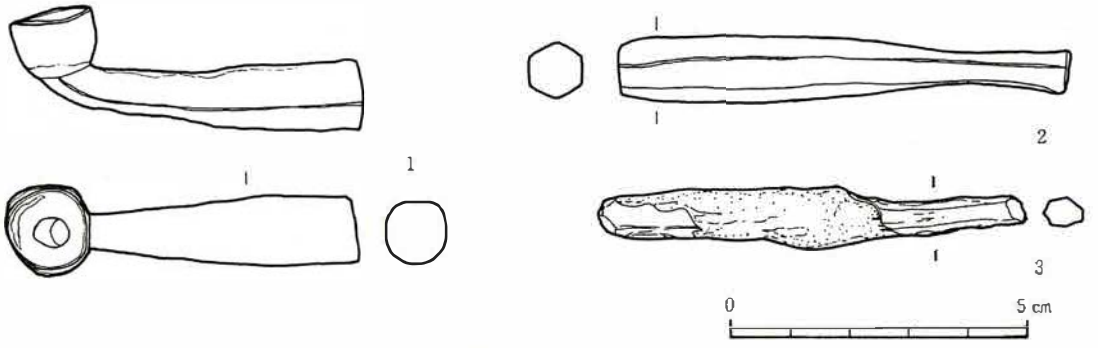
No.	遺　構	石　質	備　考	No.	遺　構	石　質	備　考
1	SD05	砂　岩	板碑の転用	4	SE03	安山岩	
2	SE02	安山岩		5	〃	〃	
3	〃	〃					

第37図　出土遺物(石製品)

に引かれているが、個々の大きさに規格性はない。また、刻線の幅、深さについても一様ではない。

(11) 金属製品

3点出土している。煙管は雁首部（第38図1）と吸口部（第38図2）で、いずれも銅製である。雁首は全長 5.9cm、吸口は 7.6cmで、断面形は六角形である。不明鉄製品（第38図3）は断面形が方形を呈し、残存長 7.2cmを計る。

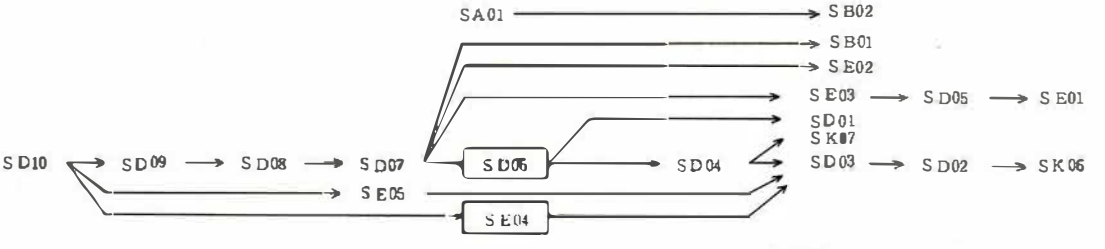


No	種類	グリット	層位	備考	No	種類	グリット	層位	備考
1	煙管	A－02	Ⅱ層	雁首部、長さ5.9cm	3	不明鉄製品	A－05	Ⅱ層	残存長7.2cm
2	〃	A－05	〃	吸口部、長さ7.6cm					

第38図　出土遺物(金属製品)

V　ま　と　め

本調査で検出した主要な遺構を重複関係から整理すると下表のようになる。



※□は埋土中に灰白色火山灰を含む遺構。

〈遺構と遺物の検討〉　検出された遺構のうち、ＳＤ06溝跡とＳＥ04井戸跡の埋土中には、10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰が含まれていることが観察されている(註6)。したがって、時期決定にはこの2つの遺構を基準に考えることができる。ここでは降下以前のものをA期、降下以後のものをB期とする。

溝跡のうち、A期に属するＳＤ06～08溝跡は調査区のほぼ同位置で重複し、方向は南北の発掘基準線に対して、北でやや東に振れるという共通性をもっている。遺物は、表杉ノ入式に比定できる土師器等が出土していることから、平安時代のものと考えられる。B期に属するＳＤ

02溝跡とＳＤ03溝跡は、ほぼ同位置、同方向に重複しており、さらに、その北側を東西方向に延びるＳＤ01溝跡とは、「Ｔ」字状になる位置関係にあり、そこには規則性をみることができる。遺構の時期を検討できる遺物には、ＳＤ02・05溝跡出土の瓦質土器がある。これに類似するものを出土する遺跡とその時期についてみると、仙台市鴻ノ巣遺跡で中世末～近世、南小泉遺跡で近世、今泉城跡で中世中頃～近世初頭、仙台城三ノ丸跡では近世初頭、多賀城市新田遺跡では美濃大窯Ⅲ期の施釉陶器、唐津の椀・皿と共伴しており、中世末頃と考えられている（註７）。したがって、本遺跡出土の瓦質土器については、共伴する遺物に近世の陶磁器類がないことなども合わせて、中世末～近世初頭のものとみておきたい。

井戸跡は、ＳＥ05井戸跡を除くと、すべて素掘りのものである。ＳＥ05井戸跡については、ＳＥ04井戸跡との位置関係、井戸枠の方向、さらにＳＤ07溝跡出土の丸瓦が本井戸跡出土のものと接合するなどの点を考慮し、Ａ期に属するものと考えることができる。Ｂ期の井戸跡は、大形の土坑とともに、調査区のほぼ中央に集まる傾向がある。

土坑は、大部分がＢ期に属するものであり、ＳＫ06土坑より中世陶器が出土している。

掘立柱建物跡及び柱列跡は、調査区南東部にそのまとまりがあり、さらに調査区外に広がる可能性が強い。これらはすべて発掘基準線に対し、ほぼ一致する方向を示すことから、ある程度の規則性をもつ建物群であると考えられる。ＳＢ01・02建物跡は、他の遺構との位置関係や形態、規模等の点から、Ｂ期に属するものとみることができる。また、ＳＡ01柱列跡については、大形で方形を呈する掘り方をもつことや、ＳＢ02建物跡に切られていることより、おそらくＡ期に属するものと推察される。

なお、各遺構から出土するロクロ未使用の土師器は、その形態や器面調整の特徴から、古墳時代中期の南小泉式に比定できるものである。すべての遺構で、これより新しい時期の遺物と混在している。

〈遺構の構成と年代〉　Ａ期は溝跡、井戸跡、掘立柱列跡より構成される。年代については、前述した灰白色火山灰の降下年代から、10世紀前半を下限とすることができる。また、奈良時代に上がる確実な遺物も出土していないことより、平安時代における変遷であると理解される。

Ｂ期は溝跡、井戸跡、土坑、掘立柱建物跡より構成される。これらは複数の重複関係をもつことから、少なくとも２時期以上の変遷が予想できる。調査区を東西方向に延びるＳＤ01溝跡と南北方向に延びるＳＤ03溝跡は、重複関係がなく、埋土中に植物遺体を多量に含むなど類似した様相を示す。また、ＳＤ03溝跡の北端とＳＤ01溝跡の間には、掘り残した箇所を有している。これは、通路の役割を果す土橋とみることができる。これに関連して、南側にはＳＤ03溝跡に付随する円形の土坑があり、南壁沿いに打ち込まれている杭列とともに、溝の端部における水流調節の働きをもっていた施設と推察される。これらのことから、ＳＤ01溝跡とＳＤ03溝

跡は、同一時期に機能していたと考えられ、さらに、この南東部には井戸跡、土坑、掘立柱建物跡が配置されていることを考え合わせれば、居住域を区画する性格をもつものといえよう。これと同様に、何らかの区画の役割を果すと思われる溝は、近接する新田遺跡と鴻ノ巣遺跡でも検出されている。両遺跡とも中世のものである。

B期の遺構群の年代については、調査面積が限られていることや、遺物の出土が僅少であることなどから、遺構の細かな変遷を追うには無理がある。したがって大まかな年代としては、B期の中で比較的新しい時期にあたるSD02・05溝跡から、前述した瓦質土器が出土していることより、この下限時期が遺構全体の下限とさほど変わらないものと考えられる。また上限については、なお不明な点が多いが、各遺構の間にそれほどの時期差があるとは思えないことより、B期の年代をおよそ中世後半から近世初頭の間に納めておきたい。

（註）

註1．宮城県教育委員会「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」宮城県文化財調査報告書第52集（1978）
註2．多賀城市教育委員会「新田遺跡現地説明会資料」（1982･83）
註3．宮城県教育委員会「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集（1974）
仙台市教育委員会「鴻ノ巣遺跡」仙台市文化財調査報告書第32集（1981）
仙台市教育委員会「鴻ノ巣遺跡」仙台市文化財調査報告書第44集（1982）
註4．宮城県教育委員会「市川橋、山王遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和53年度分）』宮城県文化財調査報告書第57集（1979）
多賀城市教育委員会「山王・高崎遺跡発掘調査概報」多賀城市文化財調査報告書第2集（1981）
多賀城市史編さん委員会「多賀城」多賀城市史編さん報告書第1集（1980）
註5．仙台市教育委員会「今泉城跡」仙台市文化財調査報告書第58集（1983）
註6．白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所（1980）
註7．仙台市教育委員会「鴻ノ巣遺跡」仙台市文化財調査報告書第32集（1981）
仙台市教育委員会「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第52集（1983）
仙台市教育委員会「今泉城跡」仙台市文化財調査報告書第58集（1983）
仙台市教育委員会「仙台城三ノ丸跡」仙台市文化財調査報告書第76集（1985）

〈引用・参考文献〉

田中則和他「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集（1984）
工藤哲司他「富沢水田遺跡第1冊」仙台市文化財調査報告書第67集（1984）
斎野裕彦他「仙台平野の遺跡群Ⅲ」仙台市文化財調査報告書第65集（1984）
草戸千軒町遺跡調査研究所「第31次発掘調査概要」（1982）
〃　「草戸千軒No.111」（1982）
千葉地遺跡発掘調査団「千葉地遺跡」（1982）
鶴ヶ岡八幡宮境内発掘調査団「鶴ヶ岡八幡宮境内発掘調査報告書」（1983）
中島直幸他「葉畑～佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査～」唐津市文化財調査報告書第5集（1982）
〃　「後河内遺跡」唐津市文化財調査報告書第7集（1983）
奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅸ」奈良国立文化財研究所学報第34冊（1978）
〃　「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」奈良国立文化財研究所報第31冊（1978）
福島県教育委員会「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ・御山千軒遺跡」福島県文化財調査報告書第109集（1983）
岩手県教育委員会「東北新幹線関連埋蔵文化財調査報告書Ⅵ集・落合Ⅱ遺跡」岩手県文化財調査報告書第50集（1980）

Ⅵ　山王遺跡から出土した井戸枠材と木製杭について

東北大学植物園　内　藤　俊　彦

山王遺跡から出土した井戸枠材と木製杭の材質と年輪幅などについて、調べた結果は次のようであった。

資料は表1に示すように、杭9本、井戸枠6本である。杭(11、12、31、38、39)は溝に打ち込まれていたもので中世後半から近世初頭のものと推定されており、井戸枠（17～19、28、29）および杭（21、22、24、25）は平安時代のものと推定されている。

木製杭として利用されていた樹種は、カスミザクラ、カマツカ、ウラジロノキ、アカシデ、コブシ、コナラ、イヌブナの7種であった。また、井戸枠として利用されていた樹種は、アカシデ、カマツカ、ウラジロノキの3種であった。これらの樹木は、山王遺跡の周辺の丘陵地に広く見られるものであり、周辺から伐採して利用したものであろう。

資料番号11、17、19、31の4つについて年輪幅、年数などを調べた結果は、図1、2に示した。11はカスミザクラであり、年数は29年を数えた。直径は 5.4cmでありカスミザクラの生長から見ると、主幹ではなく枝を利用したものと考えられる。また、図2より直径の肥大が小さくなっていることから、下方の枝で被圧されて葉数も少なくなっているものであろう。31はコブシであり、23年生の枝を利用したものと推定される。この枝は図2に示すように、まだ肥大成長が抑えられていないものと思われる。19はウラジロノキで、肥大生長は順調であり、直径は約 4.2cmであるが、やはり枝と考えるのが妥当であろう。17はアカシデの13年生のものである。アカシデの生長から見ると実生したものの主幹と考えることもできるが、利用状況などを考え合わせると枝を利用したと考えるのが妥当であろう。

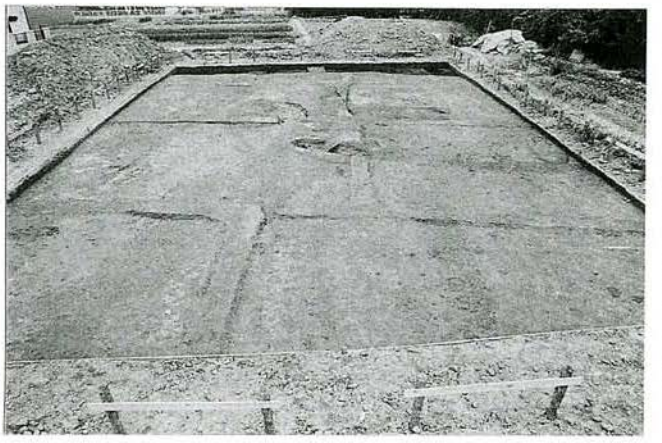
また、11のカスミザクラと17のアカシデは、細胞の大きさや導管などの分布状態から夏材と思われる。19のウラジロノキと31のコブシは秋材であった。このことは、杭や井戸枠に利用した木材は、それらを作製する時に新たに伐採したものだけではなく、前年などに伐採してあったものなどをも利用したものと考えられる。

資料番号	図番号	遺構名	樹種名	年数	備考
R－11	第34図2	SD03	カスミザクラ	29	杭
12	第35図2	SD03	カマツカ	—	杭
17	第31図3	SE05	アカシデ	13	井戸枠材
18	第31図1	SE05	カマツカ	--	井戸枠材
19	第32図1	SE05	ウラジロノキ	19	井戸枠材
21	第33図1	SE05	イヌブナ	—	杭
22	第33図3	SE05	ウラジロノキ	—	杭
23	第31図4	SE05	ウラジロノキ	—	井戸枠材
24	第33図2a	SE05	アカシデ	—	杭
25	第33図4a	SE05	アカシデ	—	杭
28	第31図2	SE05	アカシデ	—	井戸枠材
29	第32図2	SE05	アカシデ	—	井戸枠材
31	第34図3	SD03	コブシ	23	杭
38	第35図1	SD03	コナラ	—	杭
39	第35図3	SD03	コナラ	—	杭

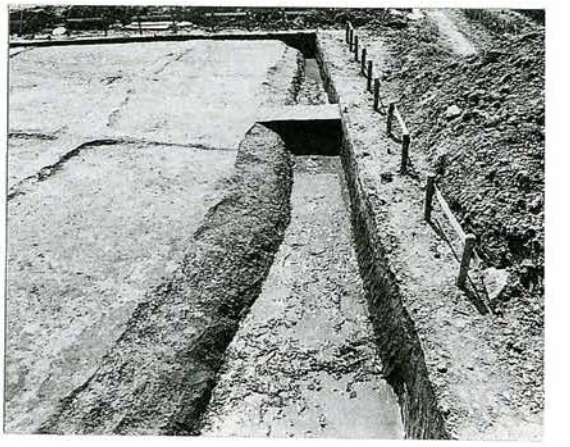
表1　井戸枠材と木製杭の樹種

図1　井戸枠および杭の年輪幅

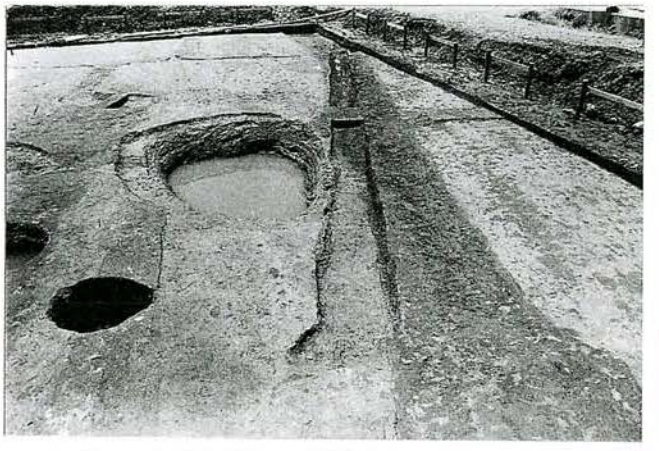
図2　井戸枠および杭の直径の経年変化



図版１　農地整理前の畦畔（南側より）



図版２　ＳＤ01溝跡（東側より）



図版３　ＳＤ02溝跡（北側より）

図版４　ＳＤ03溝跡（北側より）

図版５　ＳＤ03内土坑状落ち込み堆積状況

図版６　ＳＤ03内土坑状落ち込み（南側より）

図版７　下駄出土状況（ＳＤ02）

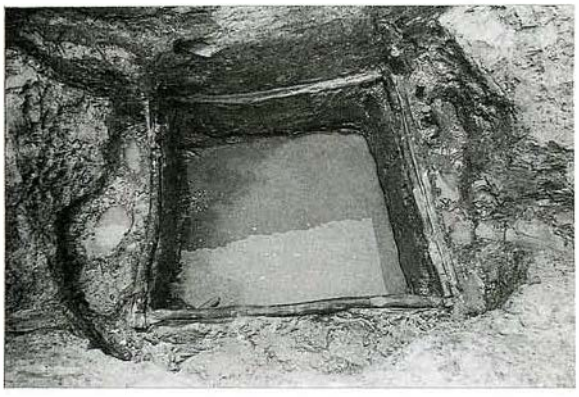
図版８　漆器椀出土状況（ＳＤ05）

図版9　ＳＥ01井戸跡

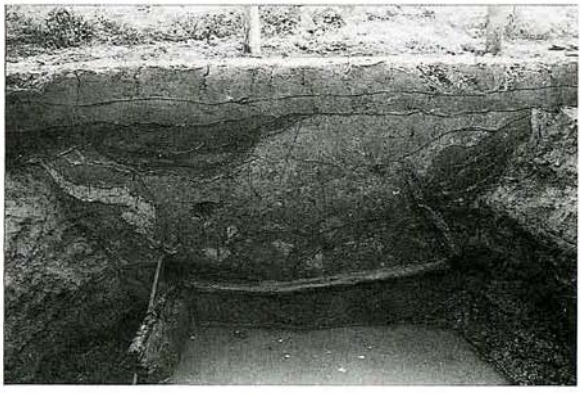
図版10　ＳＥ02井戸跡

図版11　ＳＥ03井戸跡

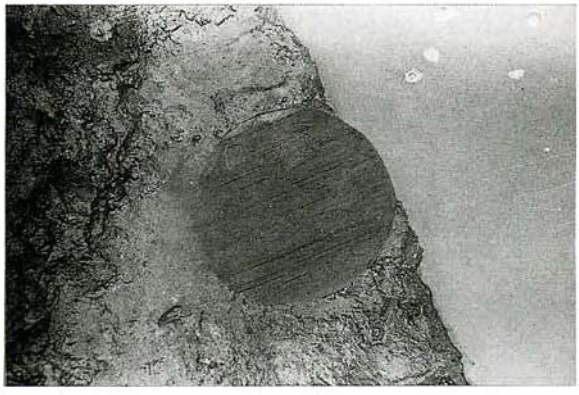
図版12　ＳＥ04井戸跡



図版13　ＳＥ05井戸跡



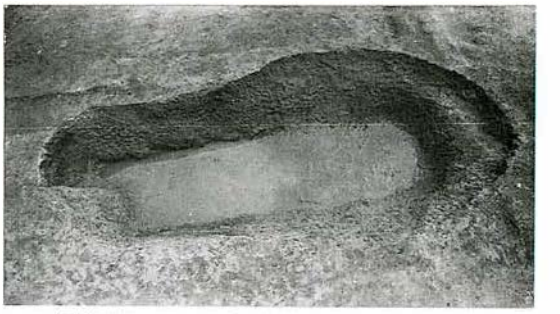
図版14　ＳＥ05土層堆積状況



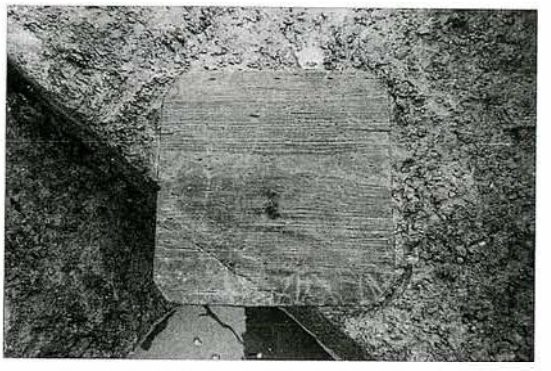
図版15　曲物底板出土状況（ＳＥ04）

図版16　盤出土状況（ＳＥ05）

図版17　ＳＫ06土坑



図版18　ＳＫ07土坑



図版19　折敷出土状況（ＳＫ06）

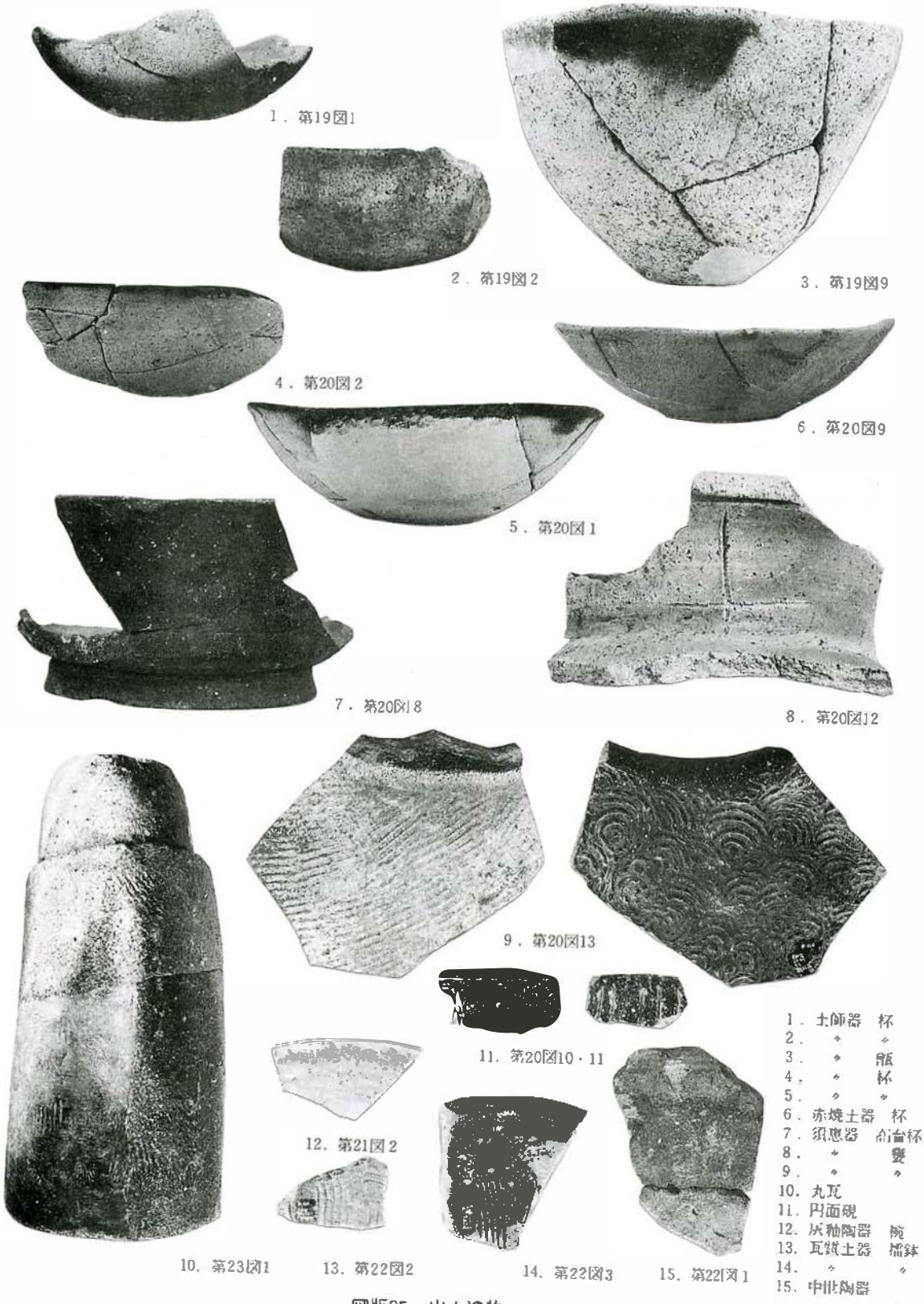
図版20　ＳＤ07・09溝跡等（北側より）

図版21　ＳＤ06・07溝跡等（北側より）

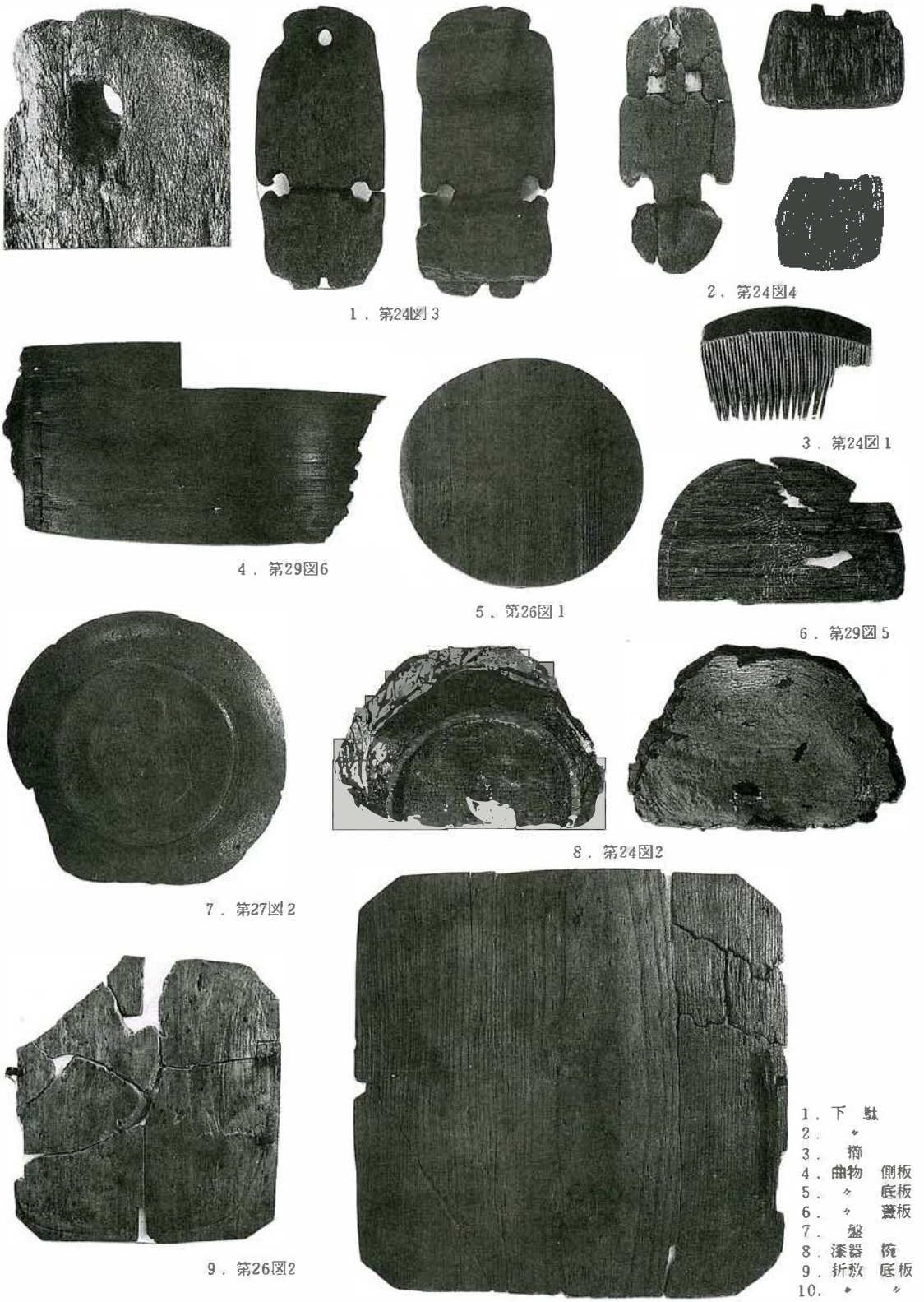
図版22　ＳＤ06～09溝跡等（南側より）

図版23　ＳＡ01柱列跡（南側より）

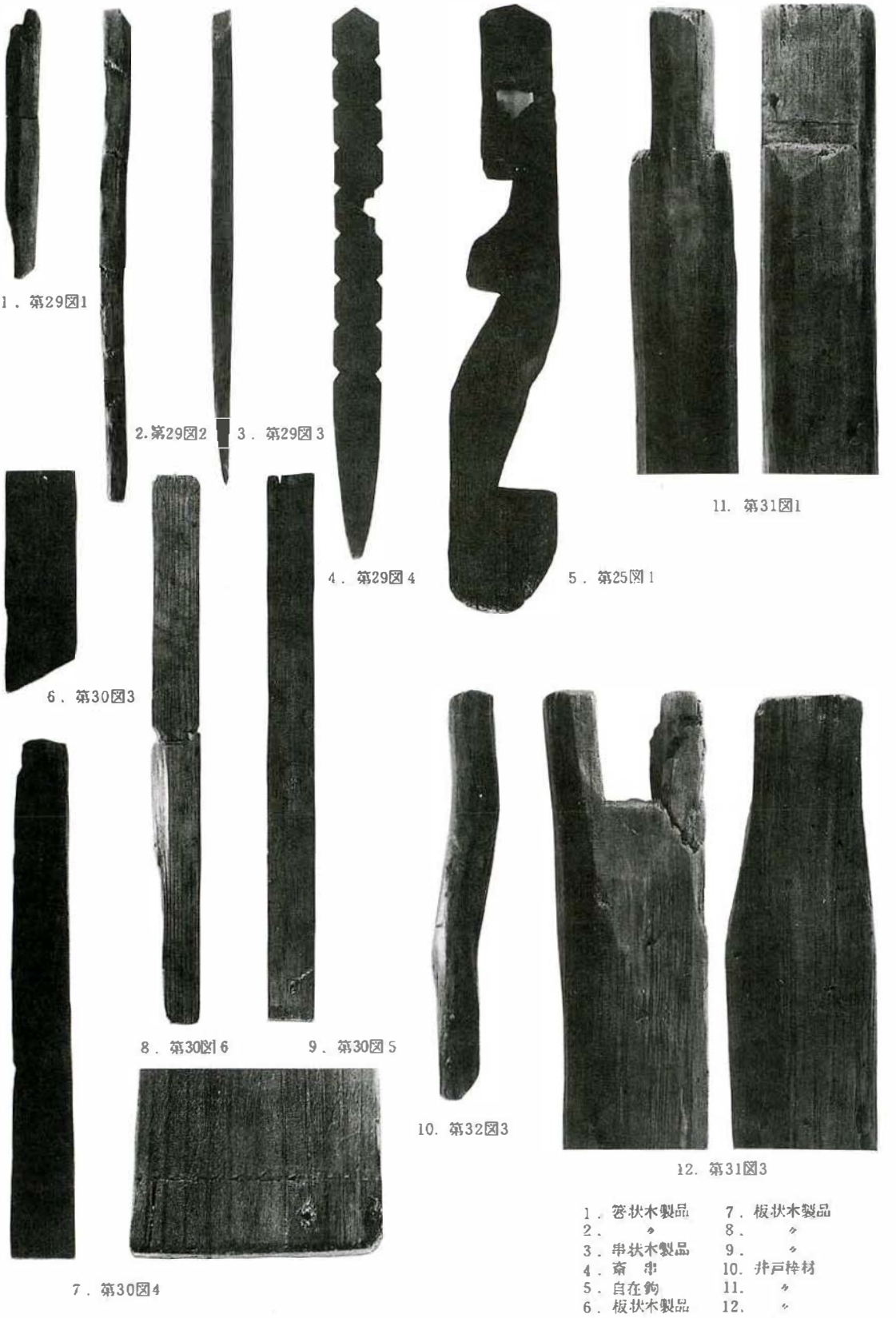
図版24　遺構面下層堆積状況（北東側より）


1．第19図1
2．第19図2
3．第19図9
4．第20図2
5．第20図1
6．第20図9
7．第20図8
8．第20図12
9．第20図13
10．第23図1
11．第20図10・11
12．第21図2
13．第22図2
14．第22図3
15．第22図1
1．土師器　杯
2．〃　〃
3．〃　瓶
4．〃　杯
5．〃　〃
6．赤焼土器　杯
7．須恵器　高台杯
8．〃　甕
9．〃　〃
10．丸瓦
11．円面硯
12．灰釉陶器　椀
13．瓦質土器　擂鉢
14．〃　〃
15．中世陶器

図版25　出土遺物

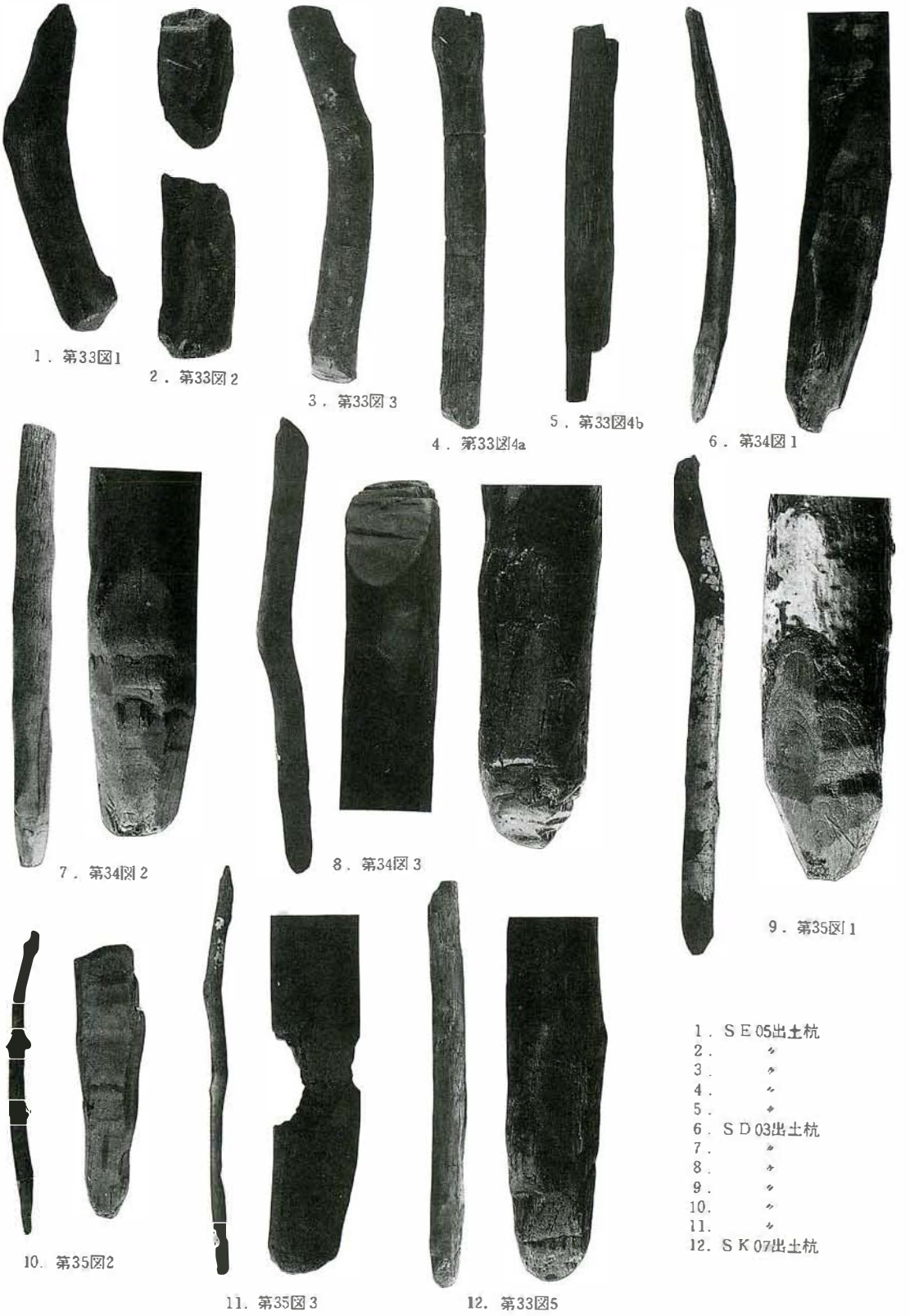


図版26　出土遺物（木製品）



1．笹状木製品
2．〃
3．串状木製品
4．斎　串
5．自在鉤
6．板状木製品
7．板状木製品
8．〃
9．〃
10．井戸枠材
11．〃
12．〃

図版27　出土遺物（木製品）



1．ＳＥ05出土杭
2．〃
3．〃
4．〃
5．〃
6．ＳＤ03出土杭
7．〃
8．〃
9．〃
10．〃
11．〃
12．ＳＫ07出土杭

図版28　出土遺物（杭）

1．第36図1

2．第36図2

3．第36図4

4．第36図5

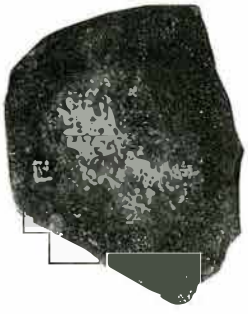
5．第36図3

6．第37図1

7．第37図3

8．第37図2

使用痕拡大



9．第37図4

10．第37図5

11．第38図1

12．第38図2

13．第38図3

1．硯
2．砥　石
3．〃
4．紡錘車
5．砥　石
〃
7．使用痕のある礫
8．〃
9．〃
10．〃
11．煙管　雁首
12．〃　吸口
13．不明鉄製品

図版29　出土遺物（石製品等）

多賀城市文化財調査報告書第９集

山　王　遺　跡

— 昭和60年度発掘調査報告書Ⅰ —

昭和61年３月31日発行

編　集　多賀城市教育委員会
発　行　多賀城市中央二丁目１番１号
　　TEL (02236) ８－１１４１

印　刷　㈲　工　陽　社
　　塩釜市尾島町８番７号
　　TEL (02236)５－１１５１㈹